北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

文学作品の「読解」授業における一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 圭志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000400

文学作品の「読解」授業における一考察

山 崎 圭 志

キーワード　国語　文学作品　読解　楽しい授業

1　はじめに

定年を迎えて2年を経過する私が、新卒で北海道の公立高校に採用されたのは 1985 年(昭和 60 年)である。その頃は、国語教師が 10 人いればすべて違った教え方をしており、生徒が楽しいか楽しくないかは別にして、高校の国語科においては個人商店のような授業が行われていた。

その頃の文学作品の授業は、次の「三読法」が主流であった。

通読・・・まず全体を読み通す。
精読・・・細かい部分に注意して読む。
味読・・・文章を味わって読む。

そして、「精読」と「多読」のどちらが良いかで意見が割れていた。

精　読・・・細かいところまで注意して読むこと。
⇕
多　読・・・本をたくさん読むこと。

生徒から「国語の勉強はどうしたらよいですか？」と訊かれた時に多読を支持する先生は「本を読め！」と言っていた。国語ができる生徒と本を多く読んでいる生徒が重なることは多いが、だからと言って今までほとんど本を読んでいない生徒が、いきなり本を読めば国語ができるようになるかと言えばそう単純ではない。そして、そうアドバイスする教師は、いつどの時期に訊かれても「本を読め！」だけで、具体的なアドバイスはしないことが多かった。同様のことは昔も今も次の会話でなされている。

古文・・・「単語を覚えろ！」
漢文・・・「句法を覚えろ！」

また、「多読」を支持する先生は、授業を自習にして本を読ませていることが多かった。定期考査後は特に多い。しかし、生徒は全員本を読んでいるわけではない。ほぼ自由時間だ。教師は「本を読んでいる人」になって見て見ぬふり。

多読が本当に効果的で良いのであれば、国語の授業は全部自由に本を読ませればよい。だが、それが授業だとは思わない。

次に「精読」だが、次がいわゆる「精読」の一例である。

> メロスの妹はなぜ「16 歳」？　「若い」で良いじゃない。それに何でわざわざ「内気」なんて書いてあるの？　普通に「妹」で良いじゃない。そこから何が読める？
>
> 16 で内気だからまだ独り立ちできない妹が、メロスにとっては気がかりだ。だけど、ある一定の条件さえクリアすれば、メロスの手から離れる。ある条件とは？　そう、結婚。だからこの 16 という年齢は実は太宰が計算して書いている。

この「三読法」と「精読」は度重なる授業時数の削減と大学受験での読み方との不一致により、高校では行われなくなっていった。

そして今、「精読」か「多読」かの話題が出ているが、この「昭和の指導法の亡霊」を今の時代に蘇らせてはいけないと考えている。

なぜならば、どちらも本当に良ければ、その後も効果的な指導法として続いていたはずだからである。したがって、次の「精読ではなく多読が重要であるという主張」には同意しない。(以下、傍線・二重傍線は要点整理のために私が付したもの)

> 平成9年(1997 年)11 月の教育課程審議会中間まとめにおいて「特に文学的な文章の<u>詳細な読解</u>に偏りがちであった指導の在り方を改め」とあり、現在でも多くの識者がこの記述をもとに論を展開したり、実践に研究に取り組んだりすることが散見されます。多くは「文学的な文章の<u>詳細な読解</u>」を否定的にとらえています。<u>精読ではなく多読が重要であるという主張</u>も少なくありません。(「国語を学ぶ会第 150 回記念例会」より)(1)

さらに言えば、教育課程審議会の「詳細な読解」という言葉であるが、これは平成8年（1996 年）7月の中央教育審議会第一次答申の中にある「小・中学校の国語におけるあらゆる文学形式の丹念な読解（中略）取扱いが行き過ぎになりがちな内容の精選を図る。」の「丹念な」を「詳細な」に変更したものである。「丹念」は、細かいところまで気を配る、真心をこめてする、という意味だが、それを「詳細な」に変更したことは恣意的である。なぜなら、「読解」と「精読」は違うものだが、「詳細な読解」はもはや「精読」だからである。

読　解・・・文章を読んで、その意味を理解すること。
　⋔
精　読・・・細かいところまでよく注意して読むこと。

なぜ当時、「精読」と「多読」で議論が交わされていたのか。それは「読解」のためには何が効果的かという方策の違いであった。

精　読・・・細かいところまで注意して読むこと。
　↑
読　解・・・文章を読んで、その意味を理解すること。
　↓
多　読・・・本をたくさん読むこと。

児童・生徒が「文章を読んで、その意味を理解する」ために必要なことは「本をたくさん読むこと」か「細かいところまで注意して読む」ことかの方策の違いである。だが、繰り返すがこの「昭和の時代の亡霊」を今の時代に蘇らせてはいけない。私の中ではどちらの方策も平成の時代に結論が出ている。大切なことは「読解（文章を読んで、その意味を理解する）」するための力を児童・生徒にどう付けるかということだ。

そのうえで、先ほどの平成9年（1997 年）11 月の教育課程審議会中間まとめの「詳細な読解に偏りがちであった指導」の「詳細」「偏り」というマイナスワードを着せられた「読解」に対して、「多くの識者がこの記述をもとに論を展開し」「文学的な文章の詳細な読解」を否定的にとらえてい」ることと、何よりもこの「教育課程審議会の中間まとめ」が 1997 年と 30 年近く前の視点であることから、令和の新学習指導要領（以下「新カリ」）の高校生たちが「読解」授業をどのように捉えているかを参考資料として紹介しながら考察する。

「読解」と「精読」の違いについては先述したが、2023 年 10 月に釧路で開催された「国語を学ぶ会特別例会『読書と読解』」で私が話題提供をした時の、その違いについて改めて定義する。

読　書・・・自 由 な読 みと解 釈――主観的――情緒的――個人的――邂逅的
　⋔
読　解・・・より正しく読んで解釈――客観的――論理的――協働的――対話的

この時私は、個人の「読書」とは別に学校の授業で「読解」は行われ、そこで学んだ読みのスキルや新たな視点をとおして再び個人の「読書」に還る、対立したものではないと結論付けた。

その後、次の識者の提言を見て「なるほど」と思ったのである。

> 授業で読む小説は小説じゃない。
> 小説はこっそり読んで密かに楽しむもの。教室で、教師の監視下で公ごととして読むものじゃない。
> 授業で読む小説は別物。小説じゃない何か。

そのとおりである。さらに言えば、これが「読書」である。亀井勝一郎氏も「読書」について、次のように述べている(2)。

> 読書の目的とは、誰と出逢うかということです。そこに一つの縁が結ばれて、初めて自分の魂が目覚めていく、つまり自分が人間として生まれていく、その助産婦の役割を果たすものこそ良書というものです。東西古今の別なき自由の邂逅の場こそ読書です。私はこれを何ものによっても崩されることなき人生の至福と思います。

さらに言えば、先の「授業で読む小説」以外の「「小説」を「読書」に替えると、私の文学作品における「授業論」になる。

授業で読む小説は「読書」じゃない。
「読書」はこっそり読んで密かに楽しむもの。教室で、教師の監視下で、公ごととして読むものじゃない。
授業で読む小説は別物。「読書」じゃない何か。

では、授業で読む小説は読書でなければ何か。それが「読解」だと私は考えている。ところが、「読解」授業に対する捉え方は様々で、批判的な見解に出遭うこともある。だが、そのような一部の提言と私が実際に観ている生徒たちの反応や評価が著しく乖離しているケースが教育の現場で散見される。要するに識者と授業を受けている生徒たちの授業観にズレを感じるのである。そこで、「誰が正しいか」ではなく「何が正しいか」という観点で、要点と論点を整理しながら、新カリの高校生や現大学生の感想を基に「文学作品の読解」授業、そして「生徒が楽しいと思う国語の授業」について考察する。
使用するデータは、数十年来、1年間の授業の最後に行っている「(私の)授業に対しての感想・評価である。これを次の 2022 年と 2023 年の2校2学年分(新カリ)、「国語を学ぶ会第 150 回記念例会」(8月)で弥田将人氏(北海道公立高校国語教諭)が話題提供された北海道釧路市の公立高校3年生(旧カリ)でのアンケート結果、「国語を学ぶ会」(6月、8月、9月)参会者(大学生を含む)のコメントより抜粋したものを「参考資料」として引用する。
2022 年　北海道帯広市の公立高校(進学校)新カリ1年生「言語文化」2単位　40 名×3クラス
2023 年　北海道札幌市の私立高校(進路多様校)新カリ2年生「文学国語／論理国語」3単位
37～38 名×3クラス
この2校での初めて私に教わった生徒たちの1年間の授業の感想・評価であるが、紹介するものは生徒が忖度して書いているわけでも私の信者なわけでもないので、純粋な気持ちで捉えてほしい。また、一人の生徒の感想の使用は一度のみとし、できるだけ多くの生徒の生の声を紹介しながら考察する。

《主題・論点》 文学教材の「発問」「議論」による「読解」授業は「無意味・無駄・有害」なのか

2 「発問」と「グループワーク」による「読解」授業について

(1)深く読んでいる子の「グループワーク」に対する気持ち

【識者の提言】
教師が教えて読みの力をつけることはできない。
「問い」を持って読むことを教えるのは、不自然である。子供が問いを持つときは自然に持つ。それでいい。
グループメンバーと折り合って読むことを強いるのではなく、一人で自由に読ませるべきだ。孤独とは、一人でいるかどうかではない。
本当に深く読んでいる子は通じない。語り合いたくない。学校で一緒に読むのは、他にも読んでいる子がいるということ。語り合いたい相手を選ぶことができないと、適当につきあうだけ。

【問い立て】要点整理
①「『問い』を持って読むことを教えるのは、不自然」なのか。
②(文学作品は)「一人で自由に読ませるべき」なのか。
③「グループメンバーと折り合って読むこと」は「本当に深く読んでいる子」は「語り合いたくない」と思い、「適当につきあうだけ」なのか。

【新カリの高校生・旧カリの大学生の捉え】参考資料(丸数字は【問い立て】の番号と対応)

2023 年　札幌市私立高校(進路多様校)2年　文学国語／論理国語(3単位)
②③私は夏目漱石が書いた小説はどれも読むのが苦手です。その時代での表現方法だったり、心情を読み取ったりするのがかなり大変で、理解できない部分が多く、読んでいる途中であきてしまい、その小説を読むのをやめてしまうのです。ですが、先生の授業で一番印象に残っているのは夏目漱石の「こころ」です。きっと私一人で読んでいれば途中でやめていました。
先生の授業は全部わかりやすくて、理解できなかったところも説明されると分かるようになって、授業を受けるのがいろいろな意味で楽しかったです。グループワークで授業を受けることも多くてコミュニケ

ーションをたくさんとれて良かったです。来年も先生がいいです。よろしくお願いします。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
②③先生の国語すごく楽しかったです。特に「こころ」の授業が印象に残っています。私はもともと本を読むのが好きで、織田作之助や谷崎潤一郎、太宰治などの作品や江戸川乱歩、夢野久などの推理小説も好きで、夏目漱石も「こころ」と「坊ちゃん」は読んでいました。「こころ」はとても読みやすくて感動した作品の一つでしたが、「こころ」を授業で読むとKの心情や私の心情がとてもよく分かり、読むだけと深く読むのではこんなにも違うのだという学びになりました。もっといろいろな本を深く読めるようになりたいと思っています。先生の授業はわかりやすく楽しいので、来年も先生がいいです。今年1年ありがとうございました。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
③私は元々物語や小説などが好きで、登場人物の心情などに共感したり、その場面を想像して読んでいくのが得意だったので、今までの国語の授業も話の内容は理解しやすかったのですが、山崎先生の授業では、それをもっと分かりやすく、細かく具体的に学ぶことができたので、授業がとても楽しかったです。できれば3年生もこの授業が良いなと思うくらい楽しい授業でした。1年間分かりやすくて楽しい授業をありがとうございました。

2024 年（8月）　釧路市公立高校（進学校）3年　「学校で文学作品を学ぶことについて」アンケートより
②一人で文学作品を読むとどうしても詰まったり、意見の偏りが出て、十二分に楽しめなくなる可能性があるので、グループ学習などでそれを防げるのは大きなメリットだと思います。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生
②授業は、自分一人ではできないような作品の解釈ができること、他の人たちの見方・考え方を知ることができるということは、大学に進学してから気付き、高校の時には気付かなかった。

【考察】
①「『問い』を持って読むことを教えるのは、不自然」なのか。
　不自然かどうかのポイントは「教える」。「『問い』を持って読むこと」は不自然ではなく、「『問い』を持って読むことを（しなさいと）教える」のは不自然。
②（文学作品は）「一人で自由に読ませるべき」なのか。
「せる」と「べき」にバイアスがかかっている。授業の感想に、本を読んでいる生徒から「一人で読んでいれば途中でやめていました」「読むだけと深く読むのではこんなにも違うのだという学びになりました」とあるので「せるべき」ではない。「一人で文学作品を読むとどうしても詰まったり、意見の偏りが出て、十二分に楽しめなくなる可能性」や「授業は、自分一人ではできないような作品の解釈ができる」ともある。
③「グループメンバーと折り合って読むこと」は「本当に深く読んでいる子」は「語り合いたくない」と思い、「適当につきあうだけ」なのか。
「折り合って」のバイアスが気になるが、否。感想には「コミュニケーションをたくさんとれて良かった」「細かく具体的に学ぶことができたので、楽しかった」とあり、授業中の観察からも右の生徒たちの態度に「適当につきあうだけ」という様子は微塵も見られなかった。仮にいたとしても「やりたくない理由」は生徒それぞれである。

（2）「問い」を出して答えを要求し、追究していく授業について

2024 年「国語を学ぶ会6月例会」での話題提供「『ごんぎつねを読めない子どもたち』の高校での読解力」を受けて

【識者・中高等学校教諭の提言・主催者による論点整理】

識者A
「ごんぎつね」で死体を煮るという答えを引き出した元凶は、問いを出して答えを要求する読解授業であって、そういう授業さえなければ、そんな答えは出てこない。問答授業が原因であると、私は考えている。そもそもその問いを追究していく意味があるのか。無駄な問いと無駄な答えで作る授業に原因がある。

識者B
「(『舞姫』の)母親の死因は？」「(「永訣の朝」で)なぜ陶椀を二つ持ったのか？」「鍋で何を似ているのか？」といった問いを出すから、ご指摘のような問題発言が出て来てしまう側面もありはしないだろうか。

中・高等学校教諭
　答えを押し付けないというが、問いを時間を取ってやらせている時点で答えを強制しているように見られないか。●●先生(注　識者名)のいう、そもそもその問いを追究していく意味があるのかという点に帰着する。

主催者
「問い」の弊害。無駄な問いと答えによる授業の非効率化。答えを強制し、生徒の自由な解釈を阻害する可能性。作品本来の魅力を損なう恐れ。

【問い立て】要点整理
①「問答授業」で答えを要求し、追究していく意味があるのか。
②「無駄な問いと無駄な答えによる問答授業」によって「問題発言」が出るので、「問いを出して答えを要求する読解授業」はしない方が良いのではないか。
③　問いを、時間を取ってやらせている時点で答えを強制しているように見られないか。
④「問いを出して答えを要求する読解授業」は「生徒の自由な解釈を阻害し、作品本来の魅力を損なう」のか。

【新カリの高校生・旧カリの大学生の捉え】参考資料

2022 年　帯広市公立高校(進学校)1年　言語文化(2単位)
②中3の時の国語の先生がすごく解りにくくて、国語＝めんどくさい、みたいなイメージが付いてきたのですが、先生のおかげで国語はおもしろいものなんだなと思うことができました！先生が私たちに質問をして答えるっていうのがとても楽しくて、答えがわからなくても他の人の答えを聞いて「ああ～なるほど」となる瞬間が好きでした笑。もっと早く先生の授業を受けたかったなと思っています。国語はおもしろいと思わせてくれるような授業をしてくださってありがとうございました！

2022 年　帯広市公立高校(進学校)1年　言語文化(2単位)
①②③④教科書から先生が問題を出してみんながそれに答えるシステムが好きだった。先生が出す問題は、僕が読んでいて気にしていない部分が多くて、深読みすると実は大切なところでおもしろかった。また、作品の中の大事な部分を質問や問いで僕たちに考えさせてくれたことで、作者の意図がよくわかった。みんな一生懸命考えるため、全員で授業を受けている感じがすごく好きだった。
　クリスマスに B‘zの歌詞などを読解するのも楽しかった。先生が先に資料や質問をしておおまかな読解をしてくれて、それだけでも作者の思いや考えがすごく伝わったのに、そこから先生の問いについて考えることで、自分自身で作者が想像していたことや、歌詞の中の人間の心や行動が頭の中に浮かんできてとても楽しかった。また、初めて聞いた曲なのにすぐ好きになって、クリスマスイブに何回も聞いた。毎回納得解がものすごく納得できるため国語の授業が楽しかった。

2022 年　帯広市公立高校(進学校)1年　言語文化(2単位)
①②③④中学の時の記憶はあまりないが、今までの国語の先生の中で一番授業がわかりやすく好きだった。授業を辛いとか嫌だと思ったことは一度もなく、いつも最後まで集中して取り組むことができた。先生の質問は自分では全く考えもつかない内容で、その質問のおかげで作品をもっと深くまで考えることができた。難しい質問もあったが、周りの人とああだこうだ言っている時間も作品に深く触れられているような気がして好きだった。タブレットで作成するレポート課題は家に帰っても書いていたが、気がつくと2時間や3時間夢中になって書いていた。最初はあまり書けないと思っていたため、ここまで書けたことが自分の自信につながり、この経験は自分にとってとてもありがたかった。高校初めての授業が山崎先生でとても良かったです。1年間本当にありがとうございました。

2022 年　帯広市公立高校(進学校)1年　言語文化(2単位)
①②③④私が中学校の頃の国語の先生は、教科書通りって感じで、私の国語のイメージはつまらな

いものでした。ですが、高校に入ってからそのイメージが変わりました。先生の授業は自分が疑問に思った所や自分じゃ気づかなかった所も考える問いにしてくれて、それを皆で考える時間が楽しかったです。私が思いつかなかった回答が多くあり、その答えは納得できるものが多く、普段から読むような小説にも応用したいと思えました。私が本を面白いと思い始めたのは高校生になってからです。1年間ありがとうございました。楽しい授業でした。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
①②③④元々従来の講義型の授業だと内容が身についていないと感じていたのですが、山崎先生のグループワークの授業を受けて「国語が分かりやすい」「身についていってる」という方向に考えがシフトしていきました。自分は元々国語が苦手、嫌いというわけではないのですが、先生の授業を受けて国語が好きになりました。また授業中に振られる質問が易しすぎず難しすぎずで答えを導くのがとても楽しかったです。1年間楽しい授業を有難うございました。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生
　同時異学習については、確かに、子どもの興味関心能力などに適した学習になったり、自由度の高いものになって子どもの力を伸ばすことに繋がるとは思うが、スライドで触れられていたように、責任や個別と一斉の使い分けなどの展開が必要になってくるため、子どもの勉強に対する質が必要になったり、教師の展開作りといった力量が問われてくるため、なかなか難しいものではないかなと感じた。
「問い」を作ることは、授業づくりにおいてかなり必要性の高いものなのではないかなと感じた。子どもたちが授業に対する没入感を得たり、探求をしていく上での一歩に繋がったりと非常に様々なところで「問い」が大切になってくると思った。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生
　物語の授業では発問の仕方にも工夫する点があると思った。先生（注　8月話題提供者）がおっしゃっていたように、場面ごとに同じような発問を繰り返したり、教師自身の読みの解釈通りに児童も読めるように、誘導的に発問し授業をすると、児童自身の読みは深まらない。

2024 年（6月）　識者
　問いというよりも価値ある課題かどうかという点も大事ではないかと考えました。価値ある課題が共有されるならば、それを議論することも面白く感ずるのではないか、ということです。いずれにせよ、子どもたちには様々な学習体験ができる3年間あるいは6年間のカリキュラムでありたいと思いました。

【考察】
①「問答授業」で答えを要求し、追究していく意味があるのか。
　少なくとも生徒は意味がないとは思っていないようだ。それは「目的」と「手段」の違いに基づくものだが、それについては「4」で考察する。
②「無駄な問いと無駄な答えによる問答授業」によって「問題発言」が出るので、「問いを出して答えを要求する読解授業」はしない方が良いのではないか。
　質問している箇所は一問一答の絶対解ではないので「問題発言」は想定内であり、むしろそこからがスタート。大切なことは生徒が教科書に「根拠」を求め、「考える／考え続ける」こと。また、「無駄な問い」「無駄な答え」の判断はいったい誰がするのか？　生徒が「無駄」だと思えばその授業はつまらないし、生徒に「価値ある課題」として「共有されるならば、それを議論することも面白く感」じ、国語を好きになる。
③ 問いを、時間を取ってやらせている時点で答えを強制しているように見られないか。
「見られ」るのが「生徒から」であれば、見られていない。「見られ」るのが生徒でなければ、この問いが出ている時点で見られているが、それは些末なことである。
④「問いを出して答えを要求する読解授業」は「生徒の自由な解釈を阻害し、作品本来の魅力を損なう」のか。
「恐れはある」ので留意するのは、「問い」については絶対解（正解）とせず、仲間とのやりとりを通してよりよい自分の納得解を探すための過程であることの自覚である。その上で「個人で考え」→「グループでディスカッションすることによって自分の根拠と論拠を説明し、他者の根拠と意見を聴いて（視野を広げて）の納得解」→「グループでの全体発表」→「クラス全体の他の意見を観て聴いて（さらに視野を広げて）の個の納得解」→「自分の考えを表現」する。この手順を踏むことによって「阻害されている」と

思う生徒は基本いないが、「自由な解釈」を「何の影響も受けない自分の考え」と定義するならば、阻害されている。「作品本来の魅力」は私自身もわからないが、作品を通して他の生徒とともに「考える」ことを楽しんでいる生徒は多い。

（3）感情移入、共感できない教科書教材の価値

【識者の提言・主催者による論点整理】

識者A
　時代状況、社会環境が大きく変わっているので、今の子どもたちにとって感情移入しづらい作品があるのは現実だと思います。また、家庭の教育力も低下し、家庭内での語彙が貧弱になってきているということが想像力の貧しさに繋がっていることも否定できないと思います。だからこそ教科書教材だけでなく、子どもが共感できる作品に出合えるような授業展開が必要不可欠ではないかと思います。

識者B
　教材の価値とはどこにあるのかということを考えました。一読してわかりにくい作品は教材あるいは学習材として不適なのかどうか。

主催者
　時代の変化により、「ごんぎつね」「永訣の朝」「舞姫」全てが古典となったのか。文化として学ぶ必要性はあるが、言語能力育成の観点からいえば別教材が適切かも知れない。

【問い立て】要点整理
①時代の変化により、古典作品となった一部教科書教材では、子どもは感情移入、共感しづらい／できないのか。
②そのような作品ではなく一読してわかりやすい子供が共感できるような作品が授業では必要なのか。

【新カリの高校生の捉え】参考資料

2022 年　帯広市公立高校（進学校）1年　言語文化（2単位）
①②入学するまで、古文や漢文はとっつきにくく難しいと感じていましたが、「伊勢物語」の授業を受け、昔の人の感覚が今とは大きく異なっていたり、逆に現在との共通点がたくさんあると知りました。読んだことがない「源氏物語」など昔の物語にも興味がわいたので、今度読んでみようと思います。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
①②私は1年間、先生の授業を学んできて印象に残っていることが2つあります。1つ目は永訣の朝です。今まで中学でも何個も詩を学んできましたが、一番印象に残った話でした。授業内で言葉の意味や作者の思いを自分なりに考え、グループワークで交流しながら取り組んだことが楽しかったし、自分とは違う視点での考えもきけて一人で考えるよりもっと内容が深くなり、楽しみつつ真剣に取り組めました。また、妹の作者に対する願いと作者の妹に対する願いがお互いに絆として結びついていてとても感動しました。他にも印象に残る単元がありましたが、永訣の朝は自己最高に楽しく学べたと思います。2つ目は歌詞の意味についてグループで考えながら学んだことです。特に私は「いつかのメリークリスマス」の歌の意味に強く心を打たれました。グループ内で意味は違ったけど、いろいろな意見をきくこともできたし、教科書だけでなく、歌も取り入れていることが山崎先生の授業のおもしろさだなと感じました。それによって解釈の仕方が違い、「幸せな歌」「はかない歌」と感じる人もいて、みんなそれぞれ違いがあっておもしろかったです。

【考察】
①時代の変化により、古典作品となった一部教科書教材では、子どもは感情移入、共感しづらい／できないのか。
　「しづらい」箇所があるのは事実だが、「できない」わけではない。
　出典は失念したが、「世の中変われば変わるほど、人の心は変わらない。」という言葉が私は好きである。
②そのような作品ではなく一読してわかりやすい子供が共感できるような作品が授業では必要なのか。

「そのような作品ではなく」と排除するのは否。「子供が共感できるような作品」はあった方がよい。

3 書き手の「意図を読む」ことについて

【識者の提言】
書き手の意図を突き止める授業の無理と無駄。
書き手（作者・筆者）が一番言いたかったことは何かを決めて何になる？ いわゆる「主題」「意図」「要旨」の問題。
作品は、冒頭から末尾までのすべてが大切。何一つ大事でないところはない。
作者が一番言いたかったことは何か、は誰にもわからない。
作者さえ気づかない深層心理がある。
それをテスト問題にするから、無理と無駄と困難が起きる。

【問い立て】要点整理
①「書き手の意図を突き止める授業」「書き手（作者・筆者）が一番言いたかったことは何かを決めて何になる？」の「突き止める」「決めて」が「考える」であれば、それでも「無理」「無駄」なのか。
②「作者が一番言いたかったことは何か、は誰にもわからない。」「作者さえ気づかない深層心理がある。」が、それを「考える」ことは「無理」「無駄」「困難」なのか。
③「それをテスト問題にするから、無理と無駄と困難が起きる」ことについて。

【高校教諭・新カリ・旧カリの高校生の捉え】参考資料

2024 年（8月） 高校教諭
①幼い読者は、物語における「わたし」と「作者自身」を混同しがちだというのは、実際、良くあるケースだと思います。
べつに混同したところで、物語そのものに感動したなら、それでいいじゃないか、という意見の人もいても良いとは思いますが、国語の授業で扱う以上は、そういったことについて曖昧にする訳にはいかないでしょうし、より解像度高く理解することが大切であるということだと、お話の内容を受け取りました。
そういった意味で、一つの物語の中で語り手が変化することは、作者が確実に意図して行っていることなので、その視点を国語の授業という場で示すことは、とても大切なことだと、私も思います。

2024 年（8月） 釧路市公立高校（進学校）3年 「文学作品を詳細に読解することについて」アンケートより
①詳細に読解することで表面的に表現技法を知るということだけでなく、その表現を用いる理由、またその効果を考える事ができる。そうすることで最初に読んだ時とは異なった印象を得られるかもしれない。一度読むだけでは自分の感想だけで終わってしまうところを詳細に読解することで、筆者の考えにまで思考を広げる事ができるので、文学作品を詳細に読解することは面白いことだと思う。

2024 年（8月） 釧路市公立高校（進学校）3年 「その他考えたこと」アンケートより
作品作品での一番伝えたいことを自分で解釈することが文学での一番大切かつ文学を楽しむことだと考えている

2023 年 札幌市私立高校（進路多様校）2年 文学国語／論理国語（3単位）
①②今まで受けた国語の授業で一番新しい気づきが多く、面白くて、楽しかった。中学生の時は国語がにがてでぜんぜん点数がとれなくてあきらめていたが、今年はすごく点数があがって国語の勉強も今までよりやる気がでて楽しく勉強ができた。
私は山月記が一番新しい気づきがあったと思う。李徴の性格やいた場所などすべてに意味がちゃんとあり、あんまり気にしないところに深い意味があることがわかったりして面白かった。一番印象に残ったこころでは、Kのことを黒いと表現したところに意味があったり私とKに理想と現実の違いがそれぞれあったり面白く、こころは最初から最後までしっかりゆっくり読みたいと感じた。

2023 年 札幌市私立高校（進路多様校）2年 文学国語／論理国語（3単位）
②1年生のときの国語の授業は楽しくてよい授業だとは思わなかったのですが、2年生の山崎先生の国語の授業がとても楽しくて、こんな私でも理解することができることが楽しくて、国語の授業が一番好

きな教科になりました。先生の質問も毎回丁度よくて「へぇ～」って思えることが多くて、今までは国語の作品一つ一つにそんなに考えることはなかったのですが、今では作品を深く読んで作者と同じような気持ちになってみたり、登場人物がなんでそんなことを考えているのかとか考えるのが苦ではなくて、逆にそれが今では一番楽しいし、気持ちがとてもよくなります！黒板も毎回すごいなって感動します。とても見やすくてさらに分かりやすかったしとてもよかったです。

【考察】

①「書き手の意図を突き止める授業」「書き手（作者・筆者）が一番言いたかったことは何かを決めて何になる？」の「突き止める」「決めて」が「考える」「考えて」であれば、それでも「無理」「無駄」なのか。

「考える」ことを「面白い」「楽しい」と考える生徒は多いので、「無理」かもしれないが「無駄」ではない。「突き止める」「決める」は「教師の考えを押し付ける」ことと繋がるので、次章「4」で考察する。

②「作者が一番言いたかったことは何か、は誰にもわからない。」「作者さえ気づかない深層心理がある。」が、それを「考える」ことは「無理」「無駄」「困難」なのか。

その作品は作者にしか分からないのだろうか。作者さえ気づかない深層心理は確かにある。だとすれば、他人の心はその人にしかわからないのだろうか。他人の心には自分でも気づかない深層心理が確かにある。その「他者の心」を自分の心情を根拠に考えること（あるいは考えない自由）を繰り返して良いのだろうか。

作者の意図は関係ない。他者の意図は関係ない。

作者・登場人物、他者の心情が正解ではなく自分の心情が正解。

または、考えても考えなくても自由。

作者が答えても正解とは限らない作品の人物の「心情」。だが、それを考えることは社会生活や人間関係で必要ではないのか。

③「それをテスト問題にするから、無理と無駄と困難が起きる」ことについて。

これはテスト（考査）の得点と平常点の二観点で評価を出していた昔の話である。現在は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点評価であるので、「絶対解」ではない「それ」は各々で表現させて「思考・判断・表現」または「主体的に学習に取り組む態度」での評価となる。「定期考査等のペーパーテストで問うな」は理解できるが、だから「教えるな」「考えさせるな」は違う。

4 「教師の押し付け」と「ぶつ切り」に読む授業について

（1）「教師の押し付け」とは

【「国語を学ぶ会第 150 回記念例会」（8月）の話題提供より】

教師の押し付けNG！①・

教師「第1場面のごんの気持ちは？」
「第2場面のごんの気持ちは？」
「第3場面のごんの気持ちは？」
「第4場面のごんの気持ちは？」
「第5場面のごんの気持ちは？」
生徒（またか・・・）

教師の押し付けNG！②・

◇教師の解釈に近づけるための・・・

教師・「お父さんは『一つの花』にどのような願いを込めたのだろうか？」
・「大造じいさんはなぜ、銃をおろしてしまったのか？」
生徒（忖度・・・）

【旧カリの大学生の捉え】

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生

ごんの気持ちは？と何度も聞かれて物語文から子どもは離れていくぶつ切りで教師の考えを押し付けるのは私も楽しい国語を主体的に学びたいと思う授業ではないと思いました。子どもが自分たちで

知りたくて読んで調べることが必要だと思いました。私もスイミーでレオ・レオニの他の作品に触れたり読んだりした授業を受けたことがあります。また、同じ作者の作品で比較して読むことができるようになったり、関係性を細かく読んで正確なものにしたりできる良い授業だと思います。

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生
「精読」についての話があったが、話の流れをぶつ切りにするような読み方は子供たちに一方的な読みの押し付けになってしまうため、自分では今まで意識して来なかった考え方であるため、指導案を考える際に注意して考えていきたいです。

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生
場面ごとに区切って心情を考えさせる授業の進め方は、教師の意図が前面に出てしまい子どもの意欲を削いでしまうのは確かにそうだと感じました。自分も指導案を考えるときにやりなので注意しようと思います。文章を読み、理解を深めることはもちろん大切ですが、そこから「翻作」するために丁寧に読んでいくという読むための動機づけを設定することで子どもに持ってほしい「学びの必要性」を持ってもらえることを可能にしていることがわかりました。

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生
一つの流れをぶつ切りにして、読む（精読する）ことは、子どもに一方的な読みを押し付けることに繋がり、子どもの読みたいという気持ちまで消してしまう。

【問い立て】要点整理
①場面ごとに区切って心情を考えさせる授業の進め方は、教師の意図が前面に出てしまい、一方的な読みを押し付けることに繋がり、子どもの読みたいという意欲をそいでしまうのか。
②児童・生徒は本当に場面ごとの心情を問われるたびに「またか・・・」とうんざりし、まとめとなるような心情を問えば「忖度」しているのだろうか。

【新カリの高校生・旧カリの大学生の捉え】参考資料

2022 年 帯広市公立高校（進学校）1年 言語文化（2単位）
①②中学校の時の国語は話を聞いていなくても、テストの問題はワークからしか出ないからと思っていつも聞いていなかったし、授業自体つまらなかったけど、高校に入って山崎先生の授業を受けてすごく楽しかったし、わかりやすいし、たまにおもしろい話や怖い話もしてくれるし、本当に良い先生だと思いました！授業では、先生がああだこうだ説明するよりグループワークが多くて、自分たちがたくさん考えることが多かったので、理解度が深まったのはもちろん、色んな視点から物事を考えるということの大切さも知りました。国語の楽しさを教えてくれたのも山崎先生です！今までの人生で一番充実した授業をうけられたと心から思ってます！！

2023 年 札幌市私立高校（進路多様校）2年 文学国語／論理国語（3単位）
①今まで受けてきた国語の授業は先生が黒板に書いた内容をノートに写すのが中心だったが、山崎先生の授業はグループになって話し合って考えるのが中心だったので、生徒が主役になって授業が進められているなとすごく感じた。また先生自身が生徒に寄り添ってくれていたので、ただ教えてもらっているというよりも、一緒に授業をしている感覚になることが多かった。教科書に載っている物語なども、先生の授業だと感情移入がしやすかったので、登場人物の心情や、なぜその行動をとったのかも理解しやすかった。3年生になってもまた先生の授業を受けたいと思えるような1年だった。ありがとうございました。

2023 年 札幌市私立高校（進路多様校）2年 文学国語／論理国語（3単位）
①私は文章を読むだけで全然考えないタイプだったけど、先生は色んな方面で質問をしてくれるので、色んな方面から色んな考え方ができました。1年間教えてくださってありがとうございました♡

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生
②同時異学習については、確かに、子どもの興味関心能力などに適した学習になったり、自由度の高いものになって子どもの力を伸ばすことに繋がるとは思うが、スライドで触れられていたように、責任や個別と一斉の使い分けなどの展開が必要になってくるため、子どもの勉強に対する質が必要になったり、教師の展開作りといった力量が問われてくるため、なかなか難しいものではないかなと感じた。

「問い」を作ることは、授業づくりにおいてかなり必要性の高いものなのではないかなと感じた。子どもたちが授業に対する没入感を得たり、探求をしていく上での一歩に繋がったりと非常に様々なところで「問い」が大切になってくると思った。

【考察】

① 場面ごとに区切って心情を考えさせる授業の進め方は、教師の意図が前面に出てしまい、一方的な読みを押し付けることに繋がり、子どもの読みたいという意欲をそいでしまうのか。

「教師の意図が前面に出る」かどうかに関しては、私は「場面ごとに」「心情を考えさせ」る授業を意図しているが、生徒の感想には「読むだけで全然考えないタイプ」だったが、「色んな方面から色んな考え方ができ」た、「色んな視点から物事を考えることの大切さ」も知ったとある。また、「一方的な読みを押し付けることに繋がる」かどうかは、「先生がああだこうだ説明する」のではなく、「自分たちがたくさん考えることが多かった」や「生徒が主役なって授業が進められているとすごく感じた」「一緒に授業をしている感覚になることが多かった」とあるので、生徒たちにとって「心情を考えさせる授業」が必ずしも「教師の意図が前面に出て」「一方的な読みを押し付けることに繋が」ってはいないことがわかる。「読みたいという意欲をそいでしまう」ことについては、そのような生徒からの声はなく、むしろ「もっといろいろな本を深く読めるようになりたい」「こころは最初から最後までしっかりゆっくり読みたいと感じた」とある。

② 児童・生徒は本当に場面ごとの心情を問われるたびに「またか・・・」とうんざりし、まとめとなるような心情を問えば「忖度」しているのだろうか。

最後の大学生の言葉に「『問い』が大切」とあるが同意。そして、児童・生徒が「またか」と思うかどうかに関しては、次の「形象読み」の概念が「問いの質」を定める。

「形象読みの種類」（大西忠治氏）(3)

一次形象読み → その語、その文だけで読み取れる形象の読み。

二次形象読み → 他の語、他の文との対比、対応、暗示、象徴、伏線などの形象、相互の関係から読み取れる形象の読み。

児童・生徒が「またか・・・」と思うときは次に繋がらない「一次形象読み」を繰り返していることが多い。大事なのは「二次形象読み」に繋がる問いを出すことで、それが繋がると判断した箇所がその児童・生徒にとっての「根拠」になり、説明させることで「論拠」になる。

全体に焦点を当てた「まとめの問い」は「5」で考察するが、「忖度」については、児童・生徒が「純粋で素直だから忖度する」のではなく、むしろ「歪んでいるから忖度する」と考えた方がよい。「忖度しなくていいんだよ」が心の教育ではないだろうか。

（2）段落ごとに区切って「ぶつ切り」に読む授業

【新カリの高校生・旧カリの大学生の捉え】参考資料

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）

1年間授業を受けて、去年よりも内容の理解、主人公の心情を考えながら物語を読み進められたと思う。今年の授業では、一つの段落ごとに要点をまとめたり、主人公の一番伝えたい気持ちなどを理解できたおかげで、一段落ごとの心情の変化や周りの様子の違いに気づくことができ、物語の内容をよく理解できた。そして、今までは物語のあらすじや何を問われているかわからないままテストを受けていたが、内容がわからなくなったら少し戻って読み進めてゆくことが大事だとこの1年で学んだ。これからもっと学年が上がるにつれて難しい物語を読み、学んでいくと思うが、常日頃から読書をして段落ごとの人物の心情の変化に注意しながら読み、国語を楽しく学んでいきたいと思った。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生

私も物語教材におけるぶつ切りの読解については反対である。物語は全体を通した流れがあり、それを切ってしまうと児童の思考も切ってしまうのではないかと思うからである。また読書と読解との関連についても勉強になる部分が多かった。読書をしている児童がほかの物語と読み比べた感想を述べているのを見たとき、読書が読解に与える影響の強さを感じた。また児童に対する問いかけについても思考を深める上でとても大切なことであると再認識した。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生

「精読」について、私も〇〇先生（注　話題提供者名）と同じく、話をぶつ切りにするようなものや、教師の感想の押し付けは反対です。

自分で学習計画(ゴール)を設定することやシリーズの作品を複数読み重ねるという活動、また翻作は、ただ教室の中で教科書と教師に従って行う学習よりも児童なりの主体的な学習が行えるのではないかと感じました。一方で、複数作品を読んだり翻作をすることが、必ずしも「深い読み」に繋がっていかない場合もあるのではないかと考えました。思考が外に広がっていくような授業のかたちでもあると思うので、都度文学作品に意識を戻していく・または自然と児童が教材に向き合い続けられるような授業の工夫が求められるのではないかと考えます。

しかし、児童が授業の中で文学作品と向き合うには、なにより児童側のやる気や興味、ある種の(自分で決めた目標への)責任が必要だと思うので、その点において、翻作や劇化などの活動はとても効果的なのではないかとも考えました。特に低学年においては、まず読書自体を楽しむこともまた、その後の活動に効果的であると思います。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生

自分の過去を振り返ってみると、精読をする際にぶつ切りをして読んでいく授業を受けてきたように感じる。内容を丁寧に読んできたかというとそういう訳ではなく、子どもからの意見を取り入れてきたかというとそういう訳でもなく、教師の押し付けが多く取り入れられてきた中途半端な授業を自分は受けてきたのかなと感じた。

【考察】

高校生の感想には「一段落ごと」という言葉が繰り返されているが、仮に私の「読解」授業が「段落ごとに区切った授業」だったとしても、他の生徒たちの感想にも多くあるように）「教師の感想の押し付け」にはなっていないし、「生徒の思考も切って」はいない。

ではその違いは何か。それは、最後の学生が書いている「精読」による「ぶつ切り」ではないかと考えられる。「読解（＝文章を読んでその意味を理解する）」」ではなく「精読（＝細かいところまで注意して読む）」をして、場面ごとに答えを決めながら読み進める授業は、結果、「時間切れのぶつ切り」になってしまうのである。先の大学生の言葉を借りれば「内容を丁寧に読」む（私はこれこそが「読解」だと考えている）のではなく、「細かいところまで注意して」順番にすべて読む「精読」の弊害である。ではどうすればよいか。これは右の高校生と大学生の言葉の中にその種がある。

物語の「全体を通した流れ」は「段落 ≒ 場面ごとの人物の心情の変化」である。それを「教師の押し付け」をせず「子どもからの意見を取り入れ（特定の生徒の意見で授業が進む弊害には注意が必要）」「（高校では生徒自らが）心情を考えながら物語を読み進め」ることだ

「二次形象読み」を意識しながら、そのために必要な「一次形象読み」を前段で押さえておく（私はこれを伏線＝作者の意図と捉えている）ことで、「内容がわからなくなったら戻って読み進めていくことが大事」だと学び、「（すべてに）ちゃんと意味があり」と教科書に書かれている「根拠」を捜し、それに基づいた読みの大切さに気づく生徒も現れる。そして「本文に根拠を求める読み方」は、そのまま「根拠を持って解答する受験問題」と重なるのだが、「受験指導」と「国語教育」については「8」で考察する。

5　グループで「議論」させる「読解」授業について

【識者の提言】

小・中・高等学校の国語科で、

①「ごんぎつね」のごんは幸せだったか？

②「走れメロス」のメロスはなぜ走ったか？

③「こころ」のKはなぜ死んだのか？

などを問いかけたり、あるいは、そういう問いを子供から引き出して、その問いをめぐって議論させる授業がある。そういう授業では大抵、教師が予定した正解に相当する発言を子供がするまで誘導する。

そんな授業に何の意義があるだろうか？私は、無意義・無駄・有害であると考える。

文学作品を読んでどう感じどう解釈するかは、読者一人一人の自由である。同じ読者の中でも、解釈は変わる。2回目の読みで変わる場合もあるし、一か月後、一年後、十年後に代わる場合もある。解釈は生涯変わり続けるのである。そのような流動性と多様性があるのが文学作品の解釈なのだ。なのに、一回の指導で、子供全員を一つの価値あると教師が判断する解釈に導くことに何の意義があると

いうのだ。そんなことをしたら、読者が自分流に自由に解釈して作品を読む楽しみがなくなる。

読み方は人それぞれ。答えを一つに絞る読みはくだらない！

全員が同じ読みになる必要はない。
一人の中でも、読むたびに解釈が変わる。
学級全員の解釈を多数決で決めたり、教師が決めたりするのは不当。
解釈の交流は聞き合いまで。論争にしない。

【問い立て】要点・疑問点整理
①「問いをめぐって議論させる授業」では「大抵、教師が予定した正解に相当する発言を子供がするまで誘導する」という前提は正しいか。
②「無意義・無駄・有害」である「そんな授業」が指す授業は、どのような授業か。
③「一回の指導で、子供全員を一つの価値あると教師が判断する解釈に導く」ような指導は本当に行われているのか。
④「解釈の交流は聞き合いまで」で「論争にしない」方が良いのか。
⑤「問いをめぐって議論させ」「答えを一つに絞る授業はくだらない」のか。

【新カリの高校生・旧カリの大学生の捉え】参考資料

2022 年　帯広市公立高校（進学校）1年　言語文化（2単位）
①③⑤先生が授業内で設けてくれるグループワークの時間で気づかされたこと、考えさせられたこと、自分と違う意見に触れて勉強になったことがたくさんありました。1年間ありがとうございました。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
①③④⑤今年1年国語の授業を受けてみて、去年と比べて作品の内容の理解度が上がったと思いました。一つ一つの作品を丁寧に読み進めることで、作品の内容や関係がより分かるようになりました。登場人物の心情や、どうしてそうなったのかなどをグループで話し合い考えることで、一人でやり続けるのではなく、自分の意見と他の人の意見で自分たちが考える最善の答えを導き出すこともできたので、国語の内容理解が苦手な人でも一つの答えを出すことができたので、良いシステムだと思いました。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
④⑤中学の時よりもあきらかに高校の方が物語も長いし内容もレベルが高くむずかしかった。僕は最初、読むのすらむずかしかったけど、授業内でのグループワークで取り組むのは自分だと考えていなかったことや思っていないことが出てきたり、分からないことは教えてもらったりできたのでとても良かったです。
　2年生の国語は1年生に比べたら大変だったけど、深く内容を知ったり、グループワークで他人の意見も聞けたりと、物語や作品の理解を深めるという面で自分自身、1年生よりも成長できたとこの1年を振り返って思いました。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
④この1年間の国語の授業を通して自分が成長できたと思うところは話し合いの仕方です。2年生になってから、先生の授業では話し合うことが増えて、最初は自分の意見があまり言えずに他の人の意見に流されることが多かったのですが、最近では自分の意見を言えるようになったし、友達の考え方と違っても、反論せず、一度全部を聞いてから質問できるようになってきました。国語の授業だけではなく他の教科でも話し合いの時間は積極的に意見できるようになりました。

2024 年（6月）　北海道教育大学釧路校　学生
⑤たしかに行間を読み取る力は傾向として低下しているのかもしれない。しかし、あまりにもかけ離れていると思われる解答に関しては全体の場で協議すれば淘汰されるはずである。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生
「詳細に読解すること」の生徒の声にもあったように、授業で教師が答えを示したり押し付けたりすることは、国語の良さを消した授業になってしまうのだなと実感した。様々な解釈があり、対話し、考えを深

めたり視野を広げられることに国語の良さがあるのではないかと考える。

【考察】

①「問いをめぐって議論させる授業」では「大抵、教師が予定した正解に相当する発言を子供がするまで誘導する」という前提は正しいか。

「大抵、」が「あいまい語」(ex.「みんな持っているから買って」の「みんな」)かつ主語が大きくなっている。したがって、「問いをめぐって議論させる授業では、教師が予定した正解に相当する発言を子供がするまで誘導する」は、必ずしも正しくない。そうであれば、「問いをめぐって議論させる授業」の是非。「教師が予定した正解に相当する発言を子供がするまで誘導する授業」の是非。この二つを分けて考えた方がよいだろう。

②「無意義・無駄・有害」である「そんな授業」が指す授業は、どのような授業か。

「そんな授業」とは「問いをめぐって議論させる授業」「教師が予定した正解に相当する発言を子供がするまで誘導する授業」「問いをめぐって議論させる、教師が予定した正解に相当する発言を子供がするまで誘導する授業」の三つが考えられるが、「①」の考察を受けて、次の二つを結論とする。

「問いをめぐって議論させる授業」は「2(2)」の考察により、無意義・無駄・有害ではない。

「教師が予定した正解に相当する発言を子供がするまで誘導する授業」は無意義・無駄・有害である。

③「一回の指導で、子供全員を一つの価値あると教師が判断する解釈に導く」ような指導は本当に行われているのか。

これは、行われているかいないかの確認が必要。少なくとも「読解授業」を行っている教師がすべてそのような指導をしているわけではない。

④「解釈の交流は聞き合いまで」で「論争にしない」方が良いのか。

学者・識者ではないので「論争」までになることはなく、熱くなったらなったで(高校生は)楽しそうに議論している。また、生徒たちは他の生徒と議論することによって考えを整理し、読みを深めている一面がある。さらに「最初は自分の意見があまり言えずに他の人の意見に流されることが多かったのですが、最近では自分の意見を言えるようになったし、友達の考え方と違っても、反論せず、一度全部を聞いてから質問できるようになっ」たと、コミュニケーション、ディスカッションにおいて成長を感じている生徒もいる。

⑤「問いをめぐって議論させる授業」の効果はないのか。

「目的」と「手段」の話になるが、医療、介護、臨床心理系の分野で行われる「ケース・スタディ」という教育手法がある。実際起こった事例をグループで分析・検討して解決策を探るのだが、答えは一つではない。もしくは答えというものは存在しない。(これは国語の「納得解」と同じ)

では、この学習を行う目的は何か。それは自分だけの視点ではなく、視野を広げて多角的・多面的にものごとを考えるためである。

「グループで議論して答えを一つに決める」ことは「手段」であって「目的」ではない。「目的」は一面的・主観的になりがちな個人の意見と、根拠・論拠を多面的・多角的にすることである。「答えを一つに決める」ことは、あくまでそのための方策であり、他者の意見を聴いたうえで「自分の視野を広げて考える」そして、「根拠と論拠を明示して伝える」ことが「目的」である。「根拠」を明確にするために生徒たちは教科書を読み返し思考する。したがって「答えを一つに決めて何になる」ではなく、各グループで決めた答えの発表をそれぞれが聴き合い、さらに視野を広げて自分の納得解・最適解を導くための時間である。その効果については生徒の感想に書かれている。

6 「深く読む」授業は「学者のまねごと」なのか

【高校教諭のつぶやき&提言】

「より深く読む」ということの価値や意味を、●●先生(注 識者名)はどのようにお考えでしょうか?

私は「より深く読む」ことは、「より深い感動」につながると思っています。そのためのいろいろな試みを、「学者のまねごと」とか「文学研究のような」ことと切り捨てる勇気は私にはありません。

「学者のまねごと」ではなく「ことばの力を伸ばす」ことに価値がある、という意見はもちろんその通りだと思います。でも、●●先生の言う通り「より多くの小説や本に触れる」ようにするためには、小説や本を面白いと思う経験が必要であり、それが動機となると思います。それを作るためには「より深く」読んで、「より深い感動」に他の生徒とともにたどりつく、その経験がより多くの小説や本に出会わせる、ということはないでしょうか。

「話し合いは浅い」ということについては、私も自分の授業での経験上、強く同意します。中途半端な、または下手くそなアクティブラーニングは浅いものしか生まないと私も思います。でも、それなら、翻作は深いのか、深い読みを生むのか、と考えると、ことはそれほど単純ではないように感じます。

【問い立て】要点整理
① 「より深く読む」ことは「より深い感動」につながるのか。
② 「より深く読む」ことは「学者のまねごと」「文学研究のような」授業になるのか。
③ 「話し合いは浅い」授業なのか。
④ 「その経験」＝「『より深く』読んで、『より深い感動』に他の生徒とともにたどり着く経験」がより多くの本に出会わせるのか。
⑤ 「下手くそなアクティブラーニングは浅いものしか生まない」と定義すれば、「下手くそではないアクティブラーニングは深いものを生む」のか。

【新カリ・旧カリの高校生・旧カリの大学生の捉え】参考資料

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）

③⑤中学生の時から国語には苦手意識があり、物語を読むのがつらいと思ったり、勉強をしてもテストで良い点を取れず、国語のことを嫌いになりつつありましたが、山崎先生の授業でそれが変わりました。山崎先生の授業スタイルは、自分一人で考えるのではなく班のメンバーと一緒に考えて問題を解くので、わからないままの状態になりにくく、インプットしたことをアウトプットできるので物語の内容を理解しやすかった。この1年間で国語がとても深くて楽しい教科であることに気づきました。本当にありがとうございます。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）

①②③先生の授業を1年間受けて、去年よりも内容の理解、主人公の心情を考えながら物語を読み進められたと思う。文系が苦手な自分でも大幅に成績を上げることができたし、授業自体も楽しく学ぶことができてよかった。また、先生の「解説」「プリント」「問いかけ」が自分はすごく好みだったので理解しやすかった。自分は1年間の国語で「永訣の朝」「こころ」「ミロのヴィーナス」が印象に残っていて、「永訣の朝」は心を動かされた作品の一つだと感じることができた。17 年間生きてきてトップ3に入る感動する作品で、授業を重ねるごとに興味がわき学ぶことができて良かった。先生のおかげで国語が少し好きになれた気がする。1年間楽しい授業をありがとうございました！

2024 年（8月）　釧路市公立高校（進学校）3年「文学作品を詳細に読解することについて」アンケートより
　ただ読むだけも良いが、文の構成や表現などを学びながら深く読んでいくことによって、さらに深い理解や様々な解釈が生まれてくると思う。加えて、自分の中の表現や語彙なども増えるので、日本語話者としても嬉しい。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生
　文学教材を読み深めるという考え方は、単なるテキストの理解を超えて作品の本質に迫ろうとする姿勢を示しているのではないかと感じた。文学作品は、その表面に隠れた深い意味や作者の意図、時代背景を含んでおり、それらを理解することで、作品が持つ力や美しさをより一層感じることができる。たとえば、古典文学にはその時代特有の価値観や社会的状況が反映されており、それを知ることで、物語の背景や登場人物の行動がよりリアルに感じられる。また、文学教材を深く読むことで、作者が何を伝えたかったのか、その意図やメッセージに対する理解が深まる。文学は単なるストーリーテリングではなく人間の本質や社会の問題、感情の複雑さを探求する手段でもある。そのため、読み深めることによって、自己の思考や感情も豊かになり、より広い視野を持つことができるのではないかと思った。

【考察】
①「より深く読む」ことは「より深い感動」につながるのか。
「深い感動」かどうかは個人差があるが、感動した、心に残ったという生徒は現れる。
②「より深く読む」ことは「学者のまねごと」「文学研究のような」授業になるのか。
　生徒の感想を見る限り、なってはいない。また、「学者のまねごと」「文学研究のような」授業について

は次に別途「問い立て」する。

③「話し合いは浅い」授業なのか。

否。むしろそれによって「深い」というワードが散見される。

④「その経験」＝「『より深く』読んで、『より深い感動』に他の生徒とともにたどり着く経験」がより多くの本に出会わせるのか。

個人差があり、一概に言えないが、ある識者が紹介したアメリカの旧い文献の次の言葉は一つの答えであり、「他の生徒とともにたどり着く経験」を多くの生徒は「楽しい」と思っている。

「詩を読むたびに楽しむ子どもは、さらにたくさんの詩を読むだろう。その子どもの楽しみは、測り知れないし、説明することさえできない。」

⑤「下手くそなアクティブラーニングは浅いものしか生まない」と定義すれば、「下手くそではないアクティブラーニングは深いものを生む」のか。

「下手くそ」か「上手い」かの定義は分からないが、生徒の感想では、目的に沿ったアクティブラーニングは「深いもの」を生んでいる。

【問い立て】2

「学者のまねごと」「文学研究のような」授業は読解・読書の楽しみを奪うことになるのか。

【識者の提言】

文学作品を国語科の授業で取り上げる際に、研究者がしているようなやり方をさせたのでは、それを楽しめる子が少なくなってしまうのではないか？

生活の中で読む文学は楽しいのに、文学を読む楽しみが、国語科授業で奪われていたのではないだろうか？

私は、文学研究者による研究と、生活読者の読みとを区別して考えている。

文学研究では

① 構造分析
② 心理分析
③ 主題解明
④ 作家研究

等がなされる。

これらは、作品を研究対象として分析・解明する研究であって、読解・読書そのものではない。それを、授業に持ち込むことは、読解・読書の楽しみを奪うことになるのではないだろうか？

【新カリの高校生・旧カリの大学生の捉え】参考資料

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年（米日のハーフ）　文学国語／論理国語（3単位）

国語の授業は、私たちが言語を理解し表現する能力を養う上で非常に重要だと思います。その中でも先生の授業は文章の読解や表現など、さまざまなスキルを身につけることができます。先生の授業はめんどくさくてやりたくないと思うことが無く、クイズのようなおもしろさがあり、自分から学ぶ形で授業をすることができました。

2022 年　帯広市公立高校（進学校）1年　言語文化（2単位）

今まで国語の授業を受けてきて、国語を嫌いになったことはありませんでしたが、高校に入り、山崎先生の授業を受けて「好き」と自信を持って言えるようになりました。特に心情の変化を読み取ることや時代背景などの知識も増え、全く授業がつまらないと思ったことがないです。もし将来、私が国語の教員になれたとしたら、生徒から親われている先生のように授業を楽しいと思ってもらえる教員になりたいです。その時は生徒の心に残るような教員になって、後悔のない教員人生を送ります。どんな未来になっても先生の授業は（もちろん先生のことも）忘れません。国語を好きにさせてくれてありがとうございました！

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生

文学作品を授業などによって分析・解釈することで、それまでに生徒自身がもっていた作品に対する面白さや好みなどが失われうるといった考えに納得した。授業の中では教員が考えや意見を押し付けないことにも気を付けながら、生徒の多様な解釈を尊重していくことを大切にしたい

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生
　文学国語の授業はどのように在るべきなのか考えさせられた。お話を通して、生徒が認識している文学作品を読む価値と、学校教育や受験での文学作品を読む目的が乖離しているように改めて感じた。一方で、従来から文学作品を扱った授業で行われてきた、登場人物の心情の読み取りや文脈の読み取り、作品評価などの活動には学習意義がなく、間違った活動だと言うことはできないとも考える。今一度、文学国語の授業はどのように在るべきなのか考えたいと感じた。

2024 年（8月） 中学校教諭
　詳細な読解よりも多読に賛成します。しかし、精読が全く要らないかと言われればそうでもないように感じています。中には読書体験が乏しい生徒もいて、「言葉による見方、考え方」を全く知らない生徒も少数ではありますが存在するからです。教科書の学習材を活用して「読みの技」を見つけたり、確認したりした上で、多読に持っていきたいです。

【考察】
　識者が「文学研究では」で例示した
　① 構造分析
　② 心理分析
　③ 主題解明
　④ 作家研究

は、先述の「『読み』の授業研究会【読み研】」の
　① 構造読み （＝構造分析）
　② 形象読み （＝心理分析） ←これが「心情を読むスキル」
　③ 主題読み （＝主題解明）
　を彷彿させるが、「読み研」で行っているのは「文学研究」ではなく、「『読み』の授業」の研究である。
　したがって、「作品を研究対象として分析・解明する研究」ではなく、「作品の授業における『読み』を研究対象として分析・解明する研究」である。だから、「読書」ではないが「読解」するためのものである。したがって「読解・読書そのものではない」という識者の提言の「読解」部分には該当しない。
　特に小説や詩において、「登場人物の心情（の変化）を読み取る」ための「読みの技（スキル）」を授業で学ぶことは、「学習意義がなく、間違った活動だ」と言うことはできないと考える。「読書の楽しみを奪うことになる」については個人差があるだろうが、「もっといろいろな本を深く読めるようになりたい」「こころは最初から最後までしっかりゆっくり読みたいと感じた」と書いている生徒の思いは「読書の楽しさ」ではなく「読解の楽しさ」に起因するものである。
　生徒の「読む力」の育成については、次章「7」で考察する。

7 児童・生徒の「読む力」の育成について

【識者の提言】

識者A
「教師も自分の読みを語ればよい」
　どう読むべきかを教えるのではなく、個人の資格で語ればよい。
　自分の読みを個人の読みとして、正解としてではなく、個人の読みとして語ればよい。
　発言や話し合いを活発にさせて、活発な授業を作る自分に酔わないでほしい。

　国語は母国語だから授業しなくてもわかる
　自由がないところに、コミュニケーションの楽しみはない
　教師が教えて読みの力をつけることはできない

識者B
「そこで止まったら読みが深まらない」という高校教師や大学教授が私の生徒・学生時代には普通でした。小説についても評論についてもそんな指摘を当たり前のように受けましたし、講座やゼミでそのような師に倣った指導をしていた同年代もたくさん見ました。今振り返ると、あの人たちは特定の主題や思想を読ませようとしていたように思います。言葉を変えればある種の洗脳をしていたのではないか

と思います。

【問い立て】要点整理
① 「国語は母国語だから授業しなくてもわかる」のか。
② 「教師が教えて読みの力をつけることはできない」のか。
③ 「どう読むべきかを教えるのではなく、個人の資格で語ればよい」のか。

【新カリの高校生の捉え・国語科教諭の提言】

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
①私は教科書を読んでもなかなか理解できなくて中学の時から国語が苦手でした。でも今年のグループでの話し合いやプリントのおかげで理解できて楽しかったので、家では自分で音読したり、解説動画を見たり、最後の夏目漱石の「こころ」では予習するようになりました。授業での発表はわかっていても言うことや手を挙げることができなくて少し悔しいです。でも最後に国語のたのしさを知れてよかったです。1年間たのしい授業をありがとうございました。

2022 年　帯広市公立高校（進学校）1年　言語文化（2単位）
②どの授業も作品にひきこむような話し方や問いの工夫がされていて楽しかったです！『羅生門』では登場人物の心情と情景を考える事で作品の内容や理解がより深められました。1年間の授業を通して文章の読み方、テストの点数の取り方など様々なことを学び、より理解を深めることができました！！2年生になってもまた先生の授業を受けたいです！！

2022 年　帯広市高校（進学校）1年　言語文化（2単位）
②③中学の時には話を聞いて黒板に書かれたものをノートに書き写すという作業をして暗記する、ということの繰り返しで興味が持てずにいたが、高校の授業ではグループ活動や自分で考えて答えを出すということで自主的に授業に取り組むことの楽しさを知ることができたと思う。また、今までは文章を読んで問題を解くだけだったものが、作者がどういう人物だったからこうだろう、や、登場人物の関係がこういうものだったからこの文章ではこの言葉が使われているのだろうと考え予想していくうちに国語自体に興味を持って取り組めるようになったと思う。今まで興味が湧かなかった国語を先生のおかげで楽しいと感じられることが増えた。1年間本当にありがとうございました。

国語科教諭（小・中・高等学校）
②「教師が教えて読みの力をつけることはできない」
　おそらく●●さん（注　識者名）の根幹にある理念。これ、本当にそうだろうか？　いや、たしかにそうだ、と思う部分もあるのだが、例えば直接的な教授ではなくとも、環境や枠組みを整えることで子どもが読書に向かうことをうながすことはできる。また、アメリカの読書教育でも以前は「ただ読ませる」が主流だった時期もあるが、それだけだとやはり読む力の育成には効果的ではないということで、読むことの方略を直接的に教えるのが当たり前になっている。それは少なくとも「教師が教えて読みの力をつけることができる」という信念が前提になる行為だ。

【考察】
①「国語は母国語だから授業しなくてもわかる」のか。
　否。わかる児童・生徒もいれば、わからない児童・生徒もいる。また、母国語が日本語ではない児童・生徒もいる。
②「教師が教えて読みの力をつけることはできない」のか。
　私も国語教諭（小・中・高等学校）と同じ構文で「これ、本当にそうだろうか？　いや、たしかにそうだ、と思う部分もあるのだが、例えば」の形で書こうと思ったが、むしろこのテーマについて、生徒に次のA・Bのいずれかを選ばせて意見を訊くのも面白い。
　A「これ、本当にそうだろうか？　いや、たしかにそうだ、と思う部分もあるのだが、例えば～。また、」
　B「これ、本当にそうだろうか？　いや、たしかにそうだ。例えば～。また、」
　私自身は、生徒たちの反応や感想を見て「教師がその作品の内容を教えて読みの力をつけること」は（効果的に）できないと思うが、「教師がその作品を通して（『心情を読むスキル』等を）教えて読みの力をつけること」はできると考えている。
　具体的に言えば、カリキュラムの改訂の繰り返しで高校の国語の時間は大幅に削減されているため、

1年生の「言語文化」の授業で扱う小説は『羅生門』だけか、学校によっては古典に時間を割いて『羅生門』も行わない／行えない学校がある。2，3年生で「文学国語」を履修していない生徒は高校での小説は『羅生門』だけか小説ゼロ。「文学国語」を履修させている現在の学校でも2、3年生で学ぶのは『山月記』『こころ』「永訣の朝」『檸檬』である。『セメント樽の中の手紙』『とんかつ』『ナイン』『城の崎にて』『ひよこの目』等、小説をふんだんに学べた時代ではない。だから私はここ6、7年、発想を変えて『羅生門』や『山月記』、『こころ』(の内容)を教えるのではなく、『羅生門』、『山月記』『こころ』を通して「小説の読み方、言い換えれば「情景と心情を読むスキル」を教えて、「問いかけ」で整理した後、「問い」は生徒たちに「根拠を持って」考えさせている。その時に最も大切なことは、「自分がどう考えるか」ではなく、「〇〇がどう考えているか」という視点である。

③「どう読むべきかを教えるのではなく、個人の資格で語ればよい」のか。

識者は「作品をどう読むべきか」という視点だと思われるが「②」でも述べたとおり「作品を通して『情景と心情を』どう読むべきか」という視点で私は授業をしており、それに対しての生徒たちの評価は紹介しているとおりである。

この視点の違いは「そこで止まったら読みが深まらない」という高校教師が昔(注 40～45 年前)は普通だった、にも当てはまる。つまり、

A「そこで立ち止まったら読みが深まらない」→教師が「教える」授業・・・教師の「説明／語り」が増える。

≠

B「そこで立ち止まったら読みを深めることができる」→生徒が「考える」授業・・・教師の「説明／語り」が減る。

の違いである。

読みが変化するのは当然である。そして、それは生徒も教師も同じである。

私自身、定番教材を何度授業で行っても、その読みは変化している。そしてその変化は、生徒の読みによって私の読みが変化しているのである。だから、定番教材の今の読みは私の読みであって、私の読みではない。それは今までの長年の授業を通して生徒たちと一緒に考え、見つけてきた作品の読みであり、深さなのである。

故にそれを「先生の読みだ」と決めつけ、「それは先生の読みとして生徒に言えばいい」とする考えに同意できないのだ。

「生徒が見つけた」読みだからこそ、「生徒に見つけて」ほしいのである。

8 「国語が苦手／嫌い」な生徒を「好き」にするには

(1)「国語教育」と「受験教育」

【(進学校の)高校教諭のつぶやき】、

本日から、新しく担任した生徒と話をしています。すると、国語が苦手、国語が嫌いという生徒が続きました。国語が苦手という言葉の意味は試験で点数が取れないということです。私はやはり試験はだめだとおもいます。

昨年度、中学生を巻き込んで、見事な探究をしていた生徒が今年は勉強に打ち込むと言っていました。受験に備えて点数の取り方を練習すると言っていました。医者になりたい生徒が古典助動詞を完全暗記するにはどうしたらいいかと質問してきました。彼のしたい学びとどうつながっているのか。説明できない自分がいました。

●●先生(注 識者名)のおっしゃることを現実のものにするには、やはり、試験なしの自由進度学習環境が必要です。そしてそうでなければ、学校はなくなると思います。行く必要がない。学ぶ必要がないことになりかねないです。

教師が想定できる「力」とはなんなのでしょうか。「力をつける」というときの「力」とは。

私は最近「国語ができる」という言葉に違和感を感じてしまいます。

私の周りの多くの人は、話したいときに話、話したくない時に話さないで、コミュニケーションを取ったり取らなかったり自由に選びながら生きています。必要なことはできているのではないでしょうか。

●●先生がおっしゃった、国語ができるのは国語の読解をしたからではないということに大変共感しました。

【問い立て】要点整理

①「国語が苦手」「国語が嫌い」＝試験で点数が取れない生徒を「国語が楽しい」「国語が好き」にするにはどうすればよいか。
②「教師が想定できる『力』」、「『力をつける』というときの『力』とは」具体的に何か。
③「国語ができるのは国語の読解をしたからではない」は正しいか。

【新カリの高校生・旧カリの大学生の捉え】参考資料

2022 年　帯広市公立高校（進学校）1年　言語文化（2単位）
①②③中学校の頃から国語という教科が苦手で長い文章や物語を読んで問題を解くという事が好きではありませんでした。高校受験でも足を引っ張る教科になっていて、高校に入学して授業についていけるかが不安でした。ですが、山崎先生の授業を受けていくうちにそんな不安は無くなって、毎回楽しい授業で楽しく物語を解いていました。先生が自分たちに考えさせるような授業が多かったため、問題について詳しく考える事ができるようになりました。授業のスピード感も内容も終わる時間も授業を受けた自分からしてみれば完璧でした。先生の授業スタイルで好きなのはグループ学習で、友達と一つの問題について話し合うことで記憶に焼きついてテストでも活用することができました。先生の授業を通じて少しずつですが模試の点数も取れるようになってきました。とても楽しい授業をしてくれた事に感謝しています。

2022 年　帯広市公立高校（進学校）1年　言語文化（2単位）
①②1年間とても楽しい授業でした！私は特に歌詞の表現方法や情景を考える授業が印象に残っています。もともと曲は知っていたけど、歌詞の意味やどんな情景が描かれているかは考えたことがなかったので、新たな発見や「こういう意味だったんだ！」と気づくことができて、とても興味深い授業でした。表現技法の知識の定着や文をよく考える力も身につけることができてとてもためになりました。グループワークも印象に残っています。グループの人達と一緒に問いの答えを考えたことが楽しかったです。タブレットにグループの意見を入力したことで他のグループの意見も知ることができてとても良かったです。教科書を読み、指示語や接続語、キーワードなどを色分けしてしるしを書くことで内容がとても解りやすくなりました。長文で答える問題では、答えとなる部分を抜き出して、いらないところを消去したり名詞化したりと一つ一つ丁寧に答えの導き方を教えてくれたので、長文記述の問題に答える力も身につきました。本当に楽しい授業ばかりで楽しんで授業を受けることができました。1年間ありがとうございました！

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生
①私は、もともと読書は好きだけど、国語はテストで良い点をとれないから嫌いでした。塾に通ったときに国語の問題の解き方や、答え方、注目すべきポイントを学び国語の問題を解けるようになったことで、読書も国語も以前より好きになりました。この経験と先生のお話から、国語教育と受験指導、文学が好きという気持ちをつなげて、一体的に学び好きを伸ばせるような活動をしたいと思いました。

【考察】
①「国語が苦手」「国語が嫌い」＝試験で点数が取れない生徒を「国語が楽しい」「国語が好き」にするにはどうすればよいか。
「国語が嫌い」な生徒は、①教科の先生が嫌い ②試験で点が取れない→「国語が苦手」→やっぱり点が取れない→「国語が嫌い」の負のスパイラルのいずれかが多く、①は別にして、②は「試験で点が取れない」を「試験で点が取れる」に変えれば、「国語が苦手ではない」→「国語が好き」に変わる。この変化は「古典嫌い」と同じであり、「わからない。できない。」が「わかる。できる。」に変われば好きになる。具体的には、生徒と学生の感想にもある「読みのスキル」とそれを用いての「答えの導き方」を授業で「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、ほめて」やることの繰り返しだと考える。生徒の自己評価は相対ではなく絶対である。
②「教師が想定できる『力』」、「『力をつける』というときの『力』とは」具体的に何か。
「教師が想定できる『力』」は「自分で〇〇できる力」だと考える。〇〇は様々だが、付いた力は生徒が具体的に感想に書く。
③「国語ができるのは国語の読解をしたからではない」はそのとおりか。
　高校生二人の感想を読むと、そうではない。「国語ができる」＝「試験で点数が取れる」と仮定すれば、小説においては「読解」は力になっているし、「国語ができる」＝「言葉をよく知っていて、活用でき

る」だと仮定すれば、それは「読解」とは別物。

（2）「楽しむ国語」と「受験の国語」

【旧カリの大学生の捉え】

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生

今思い返せば、中学の頃は純粋に文学作品を楽しんでいたのに対し、高校に入ってからは、受験の科目としての国語であり、文学として楽しむことを忘れていたなと感じる。「国語教育」と「受験教育」との違いを感じることは多々あったので、教師になるにあたって区別していく必要があると感じた。

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生

楽しむ文学は義務教育までだったということか、と振り返れる。精神的な所を養う目的もあるはずが、機械的に受験のための文学読み込みに変化したあたり、高度になるにつれ、国語のあるべき姿（というより文章理解を養う面）がズレた世間に連れていかれるように変わってしまっているといっていいのではないのだろうか。

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生

現代における、（特に受験生にとっての）「受験で点数がとれること」と「文学的文章を深く読み、楽しめること」の価値の異なりは、想像以上に大きいものであるように思います。将来に直結しないような学習をすること自体の意義が、生徒の中で疑われているようにすら考えます。その点においては、小・中・高校の教育現場の問題というよりは、共通テストや学士と就職についてといった別の問題であるように思いますが。

また、文学を楽しみ咀嚼するためにはそれ相応の時間が必要であると思いますが、進学校では特に、その時間が確保しづらいことも問題視すべきと思います。塾に部活に習い事に課題に、時間的・精神的な余裕がない中でどれだけ文学的文章を楽しむことの意味を示しても、あまり意味がないのではないかと考えます(かなり個人の実体験による私怨が混ざってしまって申し訳ございません)。ですが、このような授業や姿勢を続けることが、現状を変えるためにも必要なのだとも思います。

定期試験の後の読書時間の確保について、具体的にどのように行われているのか詳しくお聞きしたかったです。

収斂と慣用についてとその紹介の仕方など、とても良いなと感じました。他者の解釈に触れる時に、自分の解釈を持ち続けていいと示すのが、文学的文章の読みにおいて大切なのではないかと考えます。

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生

私自身の実体験として、国語の授業や本を読むことが中学生までは好きだったけれど、高校に入り正解のある読解を行う受験教育としての国語はあまり好んで学習することは出来ませんでした。それは文学に触れ、親しむことは十分に果たされていないのではないかと考えます。中学校までの国語の学習の楽しさや面白さは、国語教育を受けることが出来ていたのだと気づくことが出来ました。学校教育として国語学習における文学作品を取り扱う際は子どもたちの考えや読解を尊重した学習を行うことが重要であると考える。児童生徒の解釈を重要視する上で、教師側が作品に向き合うことが子どもたちの学びを深めることに繋がると考えます。

【問い立て】要点整理

「受験で点数がとれること」と「文学的文章を深く読み、楽しめること」の「価値の異なりは、想像以上に大きい」のか。

【新カリ・旧カリの高校生の捉え】参考資料

2023 年 札幌市私立高校（進路多様校）2年 文学国語／論理国語（3単位）

国語の授業でグループワークというのは、小中高今までで初めての体験でしたが、とても充実したものになりました。高校に入ってから国語のテストはワークの問題を参考にしたものが多かったので、ワークの問題と答えを暗記して挑んでいました。その勉強方法ではテストの点は取れても、模試などの初めて読むものに対しては意味がなく、点数が伸び悩んでいたのですが、2年生になって変わりまし

た。山崎先生が担当になってから、指示語や対比、具体と抽象の言い換えなどを授業で解りやすく扱ってくださって文章の理解度がぐっと上がりました。中でも先生が授業でされる質問のおかげで登場人物の心情や行動の理由がよくわかって記憶に残るようになりました。おかげでワーク以外の質問がテストに出ても答えられるようになったと思います。今までの国語の先生の中で、ダントツで話し方が上手だなと思いました。私も先生みたいに日本語をもっとうまく活用できるようになりたいです。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
　山崎先生の授業は今まで考えたことのない部分まで考えて、その文章に込められた意味がたくさん知れた。また、より作者や登場人物の気持ちになりきれたと思う。最初はよくわからなかったことでも教科書からいろいろなキーワードを探して答えを見つけることができたときとてもすっきりした。模試や初めて読んだ文章でも接続詞やキーワードを意識して読むくせがついた。たまにやる一般常識や心理テストは楽な気持ちでできてすごく息抜きになっていた。楽しい授業をありがとうございました！

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語（3単位）
　私が山崎先生の授業で一番印象に残っている作品は「こころ」です。その理由は二つあります。一つは、作者の気持ちを考えたり、Kの立場になって考えたりと、注目する人が次から次へと変わっていったことです。ずっと作者だけの気持ちや心情を考えるのではなく、他の人の立場になって考えることで、より内容を深く知ることができたと思います。二つ目は、先生の話し方や説明の仕方です。例えばKが自殺してしまうところでは、何でだと思う？とか、どこを切って死んでしまったのだろうとか、必要ないようでも物語を理解しやすくするため、想像しやすいための質問をしていてリアルさを出していました。先生は本当に「国語の先生」と毎回の授業で思わされました。来年も先生に教わりたいです。

【考察】
「受験で点数がとれること」と「文学的文章を深く読み、楽しめること」の「価値の異なりは、想像以上に大きい」のか。

　大学入試の現方式は大きく次の3つに分けられる。
　①　一般選抜
　②　学校推薦型選抜
　③　総合型選抜
　いわゆる「受験で点数がとれること」は主に①一般選抜に該当し、共通テスト ≒ 個別試験で必要とされる国語力である。
　生徒たちの感想には「文学的文章を読んで質問形式で考えることがとても楽しい」というものが多いが、同時に「模試の点数／偏差値が上がった」という声も複数あることから、「文学的文章を深く読み、楽しめることと」と「模試や受験で点数を取れること」は両立していることが判る。その理由は明確で、文学作品において模試や受験では基本、心情（どういうことか／なぜか）を本文にある根拠を基に問うているからである。それも主人公の心情だけではなく、登場人物の心情や理由を無差別に訊いてくるので、授業で同じように問えば良い。だから進学校においては「受験で点数がとれること」と「文学的文章を深く読み、楽しめること」の価値の異なりはないと言ってよい。ただし進路多様校や困難校においては全員が「受験で点数がとれること」を望んでいるわけではないので、進学校ほど簡単ではないものの「想像以上に大きい」というほどではない。
　しかしなぜ大学生の声にこの「価値の異なり」が共通しているのだろうか。旧カリだから？　進学校で国語は問題演習が多かったから？　それとも、精読／読解ができない国語教諭が増えたから？　だが、次の大学生の声もある。

2024 年（8月）　北海道教育大学釧路校　学生
　文学としての国語教育の大切さや定番教材だからこそできる学びということを学びました。受験教育という言葉がすごく刺さりました。受験教育として国語を学ぶことが中学校では多く、そのころはあまり国語が好きではなかったので高校に入り、ちゃんとした国語というような暗記などではない学びを行って楽しさを感じ国語がすきになったので文学教育というところを大切にして学びを深められるようにしたいと感じました。

９ 「個読」の弊害と国語における「想像力」について

（1）「個読」の弊害について

【旧カリの高校生の捉え】

2024 年（8月） 釧路市公立高校（進学校）3年 「文学作品を詳細に読解することについて」アンケートより

文学作品を通して作者が何を伝えたいのかを考えるのは結構好き。だが登場人物の心情を読み取るのは苦手。模試では文学的文章の点がいつも低い。

2024 年（8月） 釧路市公立高校（進学校）3年 「文学作品を詳細に読解することについて」アンケート

好きじゃないやつに出会したら客観的に見れないかもしれない。

2024 年（8月） 釧路市公立高校（進学校）3年 「その他考えたこと」アンケートより

作者が伝えたいことと自分が読みとったことが上手く一致しない時に点数が壊滅的になります。

【考察】

読書における「個読」に関しては自由であり、兼好法師も『徒然草』13 段で「ひとりともしびのもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするぞこよなう慰むわざなる」と言っているように、肯定こそすれ、否定するものではない。

その上での「個読の弊害」の考察だが、一つ目は。「読書」と「受験国語」の混同である。

いわゆる「進学校」と言われていない高校では、模試において次の会話が生徒となされることがある。

生徒「評論は何を書いているかわからないから点数取れないけど小説は読めばわかることが多いから点がとれる。」

教師「そうか。小説は点が取れるんだ。」

生徒「でも、取れるときと、取れないときがある。できないときはだめ。」

次は、いわゆる「進学校」と言われている学校に勤めて、初年で3年生の担任（二人担任制）になった時の生徒との会話である。

生徒「評論は何が書いているかわかって点を取れるんだけど、小説が点を取れない。」

教師「え、そうか？ 小説こそ読めば解るだろ。」

生徒「うん。点が取れるときは面白いように取れるんだけど、そうでないときは全然だめ。小説はどうしても波がある。」

教師「〇〇（生徒名）、もしかして登場人物が自分と同じ気持ちだったら点が取れて、時代や設定が違って共感できなかったり、自分と合わなくて感情移入できなかったりしたら点が取れないってパターンか？」

生徒「そう！ 何でわかったの ̊: 」

教師「受験や模試では、評論も小説も自分がどう思うかではなく、筆者・登場人物がどう考えているかがきかれているんだよ。だから、受験では小説こそ客観的に読むといい。」

生徒「知らなかった！」

教師「今、改めて教えるよ。笑」

何のことはない、小説で点数が取れない理由は同じである。「自分読み」をしているから、問われている人物に共感する場合には自分の気持ちを選べば（あるいは書けば）正解になるが、共感できない場合は壊滅的に点が取れないのだ。右の三人（に限らず小説のテストを苦手とする）の生徒は、おしなべて「読書」の読みで「受験国語」に臨んでいるのである。

ここで「だからテストは無くすべきだ」という声には（今は）賛同しない。なぜならば、今はまだ受験にはペーパーテストがあり、それに困ったり、苦しんだりしている生徒たちが目の前にいるからである。

その方策については「8」で考察を終えているが、補足するとこのリフレーミング（自分ではなく他者がどう思うか）を小・中・高等学校のどの時期にどの学習材で行うかということである。高校では『羅生門』や『山月記』の設定があまりにも生徒の現実と離れているので難しいが、『こころ』においては「Kの理想と現実」のところでやっと具体的に教える（ここの教えは「答えを教える」ではなく「スキルを教える」）ことができる。Kの悩みがお嬢さんへの恋と精進に起因していることを生徒は理解しているが、ここに「個読（自分読み）」が入ると「Kの理想」＝「お嬢さんと付き合う／結婚する」となってしまう（これが意外と多い）のである。故に、ここで生徒に「自分がどう思うかではなく、Kがどう思っているか」を訊いていること、「心情＝台詞・行動＋背景」で読め、それはすでに（作者が）本文に書いていることを教えられるので

ある。(「教える」と「読みや答えを押し付ける」との違いに注意)
　そして、この「自分がどう思うかではなく、他者がどう思うか」という「想像力」の欠如が「個読」の二つ目の弊害かもしれない。

(2)国語における「想像力」

【主催者のまとめ・識者・教諭・大学生の捉え】

主催者のまとめ(「国語を学ぶ会6月例会」)
　特に印象的なのは、『舞姫』の授業での母親の死因に関する問いに対する生徒の反応である。生徒たちは、本文に明示的に書かれていない情報を推測することができず、教師が期待する「自殺」という答えを導き出すことができていない。この事例は読解力不足を浮き彫りにしている。

2024 年(6月)　北海道教育大学釧路校　学生
　私はもちろん現場の実態を知りませんが、「書いていないことが分からない」のは、幼いころから「書いていないことを想像する」能力を必要とされず、むしろ試験などのためには不要なものとする風潮が強くなっているためなのではと思います。授業ではそのような取り組みをしても、それは自分の人生に必要はないと切り捨ててしまっても仕方がないのではないでしょうか。

識者(6月)
「書いていないことを想像する」能力を必要とされない(子ども自身が必要と思っていない)のに、こんな風に言われてしまっては子どもたちが不憫だなと感じてしまいます。

2024 年(8月)　北海道教育大学釧路校　学生
　テストなどのために教科書やワークなどに書かれたことを答えとして暗記してしまうことから、子どもたちが自分で想像し読む力を伸ばすことができていないと感じた。想像力の大切さよりもテストなどでの評価を特に高校では重要視されていることが関係していると感じた。

2024 年(8月)　北海道教育大学釧路校　学生
　本文から想像し出した可能性の発言と想像では無い妄想などからの発言の違いが難しいと感じた。

高校教諭(6月)
　書かれていないことを想像するのが論理的思考力という部分について、論理的思考力というか、想像力ではないかなと感じました。

ジョン・キーツ(イギリスの詩人)の言葉
　耳に聴こえるメロディーは美しい。だが、聴こえないメロディーはもっと美しい

【問い立て】要点整理
① 書いていないことを想像する能力は、試験などのためには不要なものなのか。
② 書いていないことを想像する能力は、子ども自身が本当に必要と思っていないのか。
③ 書いていないことを想像する能力は、自分の人生には必要ない能力なのか。
④ 本文から想像し、出した可能性の発言と妄想などからの発言の違いは何か。

【考察】
①書いていないことを想像する能力は、試験などのためには不要なものなのか。
　「8(2)」の考察でも書いたが、受験において評論も小説も、自分がどう思うかではなく、筆者・登場人物がどう考えているかが問われている。特に小説においては、本文に明示的に書かれていない(だが本文から推測できる)心情を問われることが多いので必要。
②書いていないことを想像する能力は、子ども自身が本当に必要と思っていないのか。
　「①」の説明に納得すれば、進学を目指している生徒たちは「必要」と言うだろう。進学や試験を抜きにすれば「③」が根拠となる。
③書いていないことを想像する能力は、自分の人生には必要ない能力なのか。
　これについては「受験」とは理由が異なるので、次の「(3)」で改めて「問い立て」し、考察する。
④本文から想像し、出した可能性の発言と妄想などからの発言の違いは何か。

想像力には情報収集、整理・分析が必要で、正しい情報が根拠になる。したがって、本文に書いてあることや客観的事実を根拠にした（書いていないことの）想像が「可能性の発言」であるのに対して、根拠のない想像が「妄想」となる。違いは「根拠」があるかないか。

最後の高校教師の言葉に補足すると、書かれていないことを想像するのが「想像力」であり、書かれていないことを「根拠」と「論拠」を基に想像するのが「論理的思考力」、そして「根拠」がないのは「想像」ではなく「妄想」である。

（3）「豊かな人間性」と国語

【小学校教諭の提言】
小学校教諭（8月）

文学的文章の読解は、学習者の読解力や表現力を高めるだけでなく、豊かな人間性を育む上でも重要な役割を果たす。

【問い立て】
① 文学的文章の読解は、豊かな人間性を育む上でも重要な役割を果たすのか。
② 書いていないことを想像する能力は、人生には必要ない能力なのか。

【旧カリの高校生・大学生・小説家の捉え】

2024 年（8月） 釧路市公立高校（進学校）3年 「文学とは？」アンケートより
①・人生を豊かにするもの
・教養を身につけるもの
・自分の価値観を覆させるもの
・物事をみるときの視野を広げてくれるもの

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生
①私にとって文学作品は、登場人物から考え方や生き方を学ぶことができるツールであると考える。難しい長編小説も、コメディ溢れる面白い小説も、どれも登場人物がいて、読者は彼らの人生を追体験する。そして彼らの生き方や考え方から影響を受け、自分の生き方や考え方について考えるようになる。このように自分なりの感じ方で文学作品に浸ることこそ至福のひと時であると考えるため、確かに授業で取り上げられ分析・読解されると、正解を押し付けられたように感じてしまうかもしれない。それでも、授業で作品のよさに触れなければ自分では気づかずに見逃してしまうかもしれない。さらに、多くの人の解釈を知ることで自分の捉え方を見つめ直すことができるかもしれない。これらを踏まえると、やはり国語の授業で文学作品に触れるきっかけとして扱うことには大きな意義があると考えさせられた。

三木卓『青いピカソ』より(4)
①②自分の体験は限られたものである。その限られた体験から延長線を延ばしていく。延長線上で未知の体験をとらえ味わう。それを表現化する。その能力こそ芸術家の才能であると言うことができると思う。つまり自らに照らし出して他者の運命を自らのものとする共感の能力だ、と言うことができる。

ピカソは、うらぶれた道化師や年老いたギター弾きを友人たちであると思い、その者たちのことを通して人間を知ろうとした。彼らが楽をしないで、世界と直接にこすれあって生きている人々だからである。そしてその絵を描いている間中、彼は絵の中の人々になって生きたのだ、と思う。

【考察】
「豊かな人間性」とは、文部科学省の掲げる「生きる力」の一つで、相手や周りを思いやる心、心の琴線に触れて感動する体験などを例として挙げている。「思いやり」の意味には「相手の立場や心情を理解しようとする心」に加えて「想像・推察」がある。

もちろん「読書」によって感動したり、想像・推察しながら読むこともあったりはする。「自分読み」だけをしているから、他者の気持ちに配慮することができず、周囲を不快にしたり、傷つけたりするような言動を平気でしてしまう、というようなことはないだろうが、本をたくさん読んでいる児童・生徒のコミュニケーション能力が、意外に低かったり、頑なだったりしているケースも我々は見てきている。

あまり深く考えすぎても難しくなってしまうので、簡単な読解の方が良い。作者にしか作品の意図は分からないのだから読者側が読解の答えを出そうとすることに違和感を感じる。（高校生）

これの後半（傍線部）は「3」の識者の提言と同じ感情である。文科省のいうように、「思いやる心」や「感動する体験」が「豊かな人間性」であり「人生を豊かにする」のであれば、「自分がどう思うか」という個人的な「読書」だけではなく、「他者（登場人物）がどう思うか」を考える「読解」授業は、やはり必要である。そして、それは「無意味・無駄・有害」ではない。

昨今、日本での「思いやり」や「おもてなし」の心を海外から評価されることが増えたが、「自分ではなく相手がどう思うか」を考えるのが「思いやり」であり、それを形にしたものが「おもてなし」である。

日本の古語には、推量・現在推量・現在の原因推量・現在の婉曲・過去推量・過去の原因推量・過去の婉曲・打消推量・推定・婉曲と推量の助動詞が多いことと、多国語に訳せなかった「おもてなし」や「お疲れ様」等の言葉は、それと無関係ではないだろう。

「本人しかわからない気持ちや意図、書いていないことを想像する能力」は本当に子どもたちの人生に必要ないのだろうか。

（4）「読解」で学び得る力

【「読解力」図と教諭のコメント】

2024 年（6月） 中・高等学校教諭

なるほどと思いました。最後の読解力のスライドは、入試のかかわりで確かにと思うところがあります。

2024 年（6月） 教諭

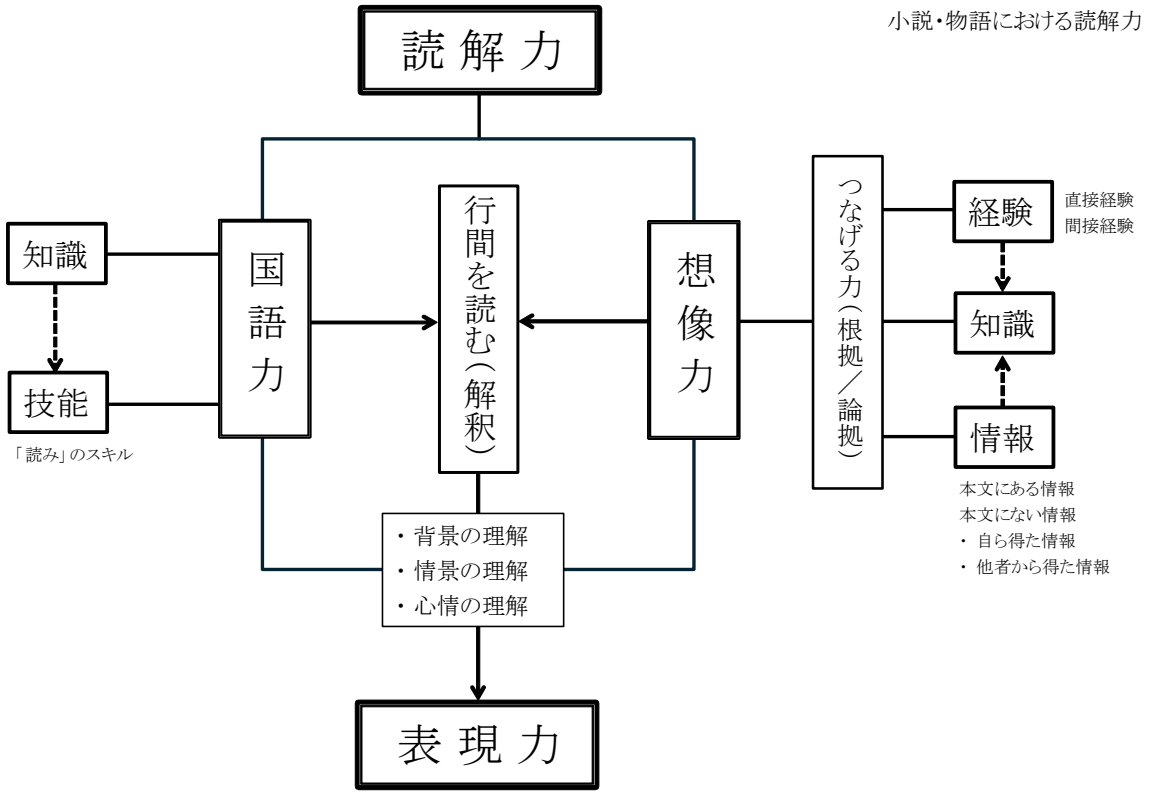
小説・物語における読解力の図が印象に残りました。自閉スペクトラム症の方の特性の一つに、イメージ力の欠如があげられます。全く同じ図の流れで「読解力」の部分に、「人間関係」という言葉を入れて子どもたちと向き合うことがあります。子どもたちに苦手な教科は？と尋ねると、「国語」と必ず言う理由のヒントを得たように感じました。国語で学び得る力が、特性のある子どもたちの大きな助けになるのではないかと思い、この図をじっくりながめながら考えたいと思いました。

2024 年（8月） 中学校教諭

特定の場面を決めて、言葉に着目して、本文から根拠をもとに自分の経験と結び付けて読む経験をさせたいと思います。

【考察】

次頁の図は「読解力」と「国語力」「想像力」の関係を整理するために 2024 年「国語を学ぶ会6月例会」での話題提供を機会に作成し、今回改訂したものである。その時に参会された先生によれば「全く同じ図の流れで『読解力』の部分に『人間関係』という言葉を入れて子どもたちと向き合う」ことがあったり、「入試のかかわりで確かに」と思ったり、「読解」で学び得る力が「人間性」（徳）と「受験」（知）に関わることを示唆しているのかもしれない。



10 「つまらない国語」の授業と「楽しい国語」の授業

ここでいうところの「つまらない国語」「楽しい国語」とは、私たち教育関係者がどう考えるかではなく、実際の高校生がどう捉えているかである。

今まで紹介した高校生たちの授業の感想には、中学校や私の授業を受けるまでの国語の授業と比較して書いているものがあるので、新カリ2校分の高校生たちと、現大学生の旧カリの時の評価を重ねて考察しよう。

2022 年　帯広市公立高校（進学校）1年　言語文化 【新カリ】

私が中学校の頃の国語の先生は、教科書通りって感じで、私の国語のイメージはつまらないものでした。ですが、先生の授業は自分が疑問に思った所や自分じゃ気づかなかった所も考える問いにしてくれて、それを皆で考える時間が楽しかったです。

中三の時の国語の先生がすごく解りにくくて、国語＝めんどくさいというイメージが付いてきたのですが、先生のおかげで国語はおもしろいものだなと思うことができました！先生が私たちに質問をして答えるっていうのがとても楽しくて、答えがわからなくても他の人の答えを聞いて「ああ～なるほど」となる瞬間が好きでした笑。

中学校の時の国語は話を聞いていなくても、テストの問題はワークからしか出ないからと思っていつも聞いていなかったし、授業自体つまらなかったけど、高校に入って山崎先生の授業では、先生がああだこうだ説明するよりグループワークが多くて、自分たちがたくさん考えることが多かったので、理解度が深まったのはもちろん、色んな視点から物事を考えるということの大切さも知りました。

中学の時には話を聞いて黒板に書かれたものをノートに書き写すという作業をして暗記する、ということの繰り返しで興味が持てずにいたが、高校の授業ではグループ活動や自分で考えて答えを出すということで自主的に授業に取り組むことの楽しさを知ることができたと思う。また、今までは文章を読ん

で問題を解くだけだったものが、作者がどういう人物だったからこうだろう、や、登場人物の関係がこういうものだったからこの文章ではこの言葉が使われているのだろうと考え予想していくうちに国語自体に興味を持って取り組めるようになったと思う。

先生が自分たちに考えさせるような授業が多かったため、問題について詳しく考える事ができるようになりました。先生の授業スタイルで好きなのはグループ学習で、友達と一つの問題について話し合うことで記憶に焼きついてテストでも活用することができました。先生の授業を通じて少しずつですが模試の点数も取れるようになってきました。

2023 年　札幌市私立高校（進路多様校）2年　文学国語／論理国語 【新カリ】

元々従来の講義型の授業だと内容が身についていないと感じていたのですが、山崎先生のグループワークの授業を受けて「国語が分かりやすい」「身についていってる」という方向に考えがシフトしていきました。

今まで受けてきた国語の授業は先生が黒板に書いた内容をノートに写すのが中心だったが、山崎先生の授業はグループになって話し合って考えるのが中心だったので、生徒が主役になって授業が進められているなとすごく感じた。

国語の授業でグループワークというのは、小中高今までで初めての体験でしたが、とても充実したものになりました。高校に入ってから国語のテストはワークの問題を参考にしたものが多かったので、ワークの問題と答えを暗記して挑んでいました。その勉強方法ではテストの点は取れても、模試などの初めて読むものに対しては意味がなく、点数が伸び悩んでいたのですが、2年生になって変わりました。先生が担当になってから、指示語や対比、具体と抽象の言い換えなどを授業で解りやすく扱ってくださって文章の理解度がぐっと上がりました。中でも先生が授業でされる質問のおかげで登場人物の心情や行動の理由がよくわかって記憶に残るようになりました。

2024 年　北海道教育大学釧路校　学生 【旧カリ】

受験教育として国語を学ぶことが中学校では多く、そのころはあまり国語が好きではなかったので高校に入り、ちゃんとした国語というような暗記などではない学びを行って楽しさを感じ国語がすきになったので文学教育というところを大切にして学びを深められるようにしたいと感じました。

【考察】

「つまらない国語」の授業（抜粋）

・教科書どおりって感じ。
・すごく解りにくい。
・今まで受けてきた国語の授業は先生が黒板に書いた内容をノートに写すのが中心。
・テストの問題はワークからしか出ないからと思っていつも聞いていなかったし、授業自体つまらなかった。
・話を聞いて黒板に書かれたものをノートに書き写すという作業をして暗記する、ということの繰り返しで興味が持てずにいた。
・文章を読んで問題を解くだけ。
・受験教育としての国語。
・従来の講義型の授業だと内容が身についていないと感じていた。

「楽しい国語」の授業（抜粋）

・自分が疑問に思った所や自分じゃ気づかなかった所も考える問いにしてくれて、それを皆で考えるのが楽しかった。
・先生が私たちに質問をして答える。
・グループワークが多くて、自分たちがたくさん考えることが多かったので、理解度が深まった。
・グループ活動や自分で考えて答えを出すということで自主的に授業に取り組むことの楽しさを知るこ

とができた。
・自分たちに考えさせるような授業。
・授業スタイルで好きなのはグループ学習で、友達と一つの問題について話し合うことで記憶に焼きついてテストでも活用できた。
・グループワークの授業を受けて「国語が分かりやすい」「身についていってる」という方向に考えがシフトした。
・グループになって話し合って考えるのが中心で、生徒が主役になって授業が進められている。
・国語の授業でグループワークというのは、小中高今までで初めての体験。
・ちゃんとした国語。暗記ではない学び。文学教育を大切にして学びを深められる。

この違いは、対比で次のように定義できる。

つまらない授業 ＝ 先生が生徒に説明――講義・暗記型――教科書どおり――黒板をノートに写して暗記――個人学習――先生が主役

≠

楽しい授業 ＝ 先生が生徒に発問――対話・読解型――教科書に明示なし――生徒がたくさん考える――協働学習――生徒が主役

「つまらない授業」の「教科書どおり」は本文に明示されていることを指導書通りに教師が講義型で説明し、板書したノートを児童・生徒が書き写して、テストのために暗記するのだろう。そのノートも国語科の場合は教員間でバラバラなので、「テストの問題はワークからしか出ない」ではなく「ワークからしか出せない」のかもしれない。
「楽しい授業」は私の授業の感想からなので偏りがあるが、たとえば「小学校の時の〇〇や中学の時に〇〇したことが楽しかった」という記載がないので、ここでは感想に重複している「先生が質問し」「グループになって話し合い」「自分たちで考えて答えを出す」授業が生徒たちにとっての「楽しい国語」の授業だったと考察しておく。
生徒たちの「つまらない国語」の授業の中に「先生の読みを押し付ける」や「同じことを繰り返し聞いてくる」が無いのは、主催者の問題提起にもあるように教師自体が「文学的文章の詳細な読解」ができる能力が低下しているのかもしれないし、「読みを押し付ける先生」が実際にはいないのかもしれない。
最後の大学生の「ちゃんとした国語」とは具体的にどのようなものか。「暗記ではない」「文学教育を大切にして学びを深められる」ものと考えられるが、それは次章「11」で考察する。

11 「文学作品を学ぶ意味」と「文学教育」の未来

【高校教諭と大学生の捉え】

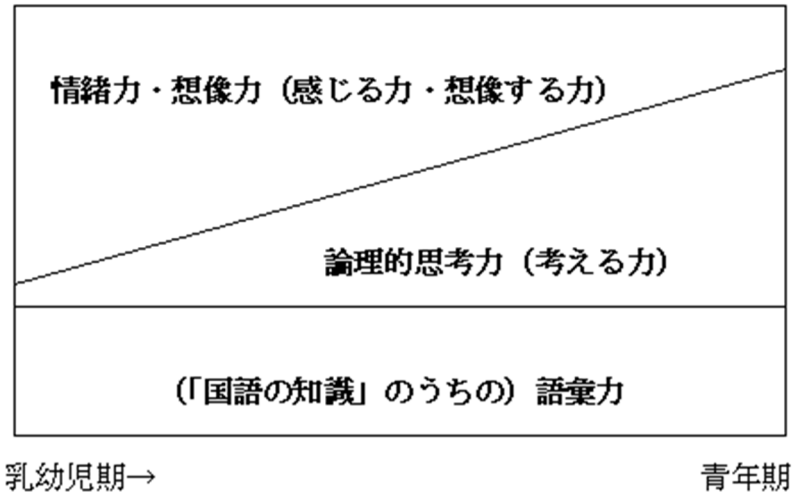
高校教諭（8月）
文学教育の意義が不明瞭となっている状況下において文学の意義についての核心をついた発表はとても新鮮でした。「異解の多様性」という発想についても考えさせられました。定番教材の教材的意義についても先生のお話をうかがいたく存じます。

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生
国語の授業が「文学作品を学ぶ意味は何か」というのを生徒に気づかせるきっかけになるような授業をしたいと思った。説明的文章でも、物語文でも、生徒それぞれの話に対する解釈は異なる。読者の自由な解釈を積極的に認める姿勢は大事だが、それでは収拾がつかなくなってしまうのではないかという問いにハッとした。自由な解釈を認めてどれも正しい、良い解釈だね、と認めてもそれでは理解に繋がらない。正しいと肯定するわけではなく、異解の多様性として尊重することが大切なのだと知ることができた。

2024 年（8月） 北海道教育大学釧路校 学生
今回取り上げられたような授業もそうだが、学校の授業において、どこまで児童・生徒の自由さが許容されるのかが気になる。自由に交流したり、板書をかけたりできるのは素晴らしい授業形態だが、その一方で、本来の授業の本筋から離れてしまう恐れがあるのではないかという部分が気になった。

【問い立て】要点整理
① 「文学教育の意義が不明瞭となっている状況下」で「文学作品を学ぶ意味は何か」について考えなければならないのはいつか。
② 読者の自由な解釈を積極的に認める姿勢は大事だが、学校の授業において、どこまで児童・生徒の自由さが許容されるのか。
③ 「文学教育を大切にして学びを深められる」「ちゃんとした国語」「本来の授業の本質」とは何か。

【考察】
①「文学教育の意義が不明瞭となっている状況下」で「文学作品を学ぶ意味は何か」について考えなければならないのはいつか。
「文学教育の意義」「文学作品を学ぶ意味」で思い浮かべるのは「古典教育の意義」「古典を学ぶ意味」である。
「2(3)」でも書かれているが、現在の定番教材が「古典」のようになっていき、なおかつ「文学国語」を高校の授業で履修できなかったり、あるいは「ちゃんとした国語」で学べなかったりした生徒たちが将来、国語の教師になる時代が来る。
その時の先輩の国語教師は「本来の授業の本筋から離れていない」授業が出来て、後輩にアドバイスできるのだろうか。
「古典教育の意義」や「古典を学ぶ意味」を結局、多くの教師が説明できず、生徒たちが納得していないように、さほど遠くない未来に「文学教育の意義」「文学作品を学ぶ意味」を同じように暗中模索することになるかもしれない。
② 読者の自由な解釈を積極的に認める姿勢は大事だが、学校の授業において、どこまで児童・生徒の自由さが許容されるのか。
下に「発達段階に応じた『国語教育における重点の置き方』」(文部科学省HPより引用)を載せたが、小・中・高、どの学年から論理的思考力を増やしていくかである。授業で「自由な解釈」をいつまでも認め続けてしまうと論理的思考力が育たないので、「どこまで児童・生徒の自由さが許容されるのか」ではなく「いつまで児童・ 生徒の自由さが許容されるのか」という視点で考えた方がよい。
③「文学教育を大切にして学びを深められる」「ちゃんとした国語」「本来の授業の本質」とは何か。
これは今の教師とこれから教師を目指す人が考え続けること。
私の答えは生徒の声の中にすべて書かれている。ただし、私の授業が「ちゃんとした国語」ではないことは自覚している。



12 おわりに
2022 年、『ルポ 誰が国語力を殺すのか』(石井光太著 文藝春秋)(5)が発売され、「ごんぎつねの読めない小学生」の話題でネットが賛否両論炎上した。炎はかなりの勢いで燃え続けたが、次のコメントによってほぼ鎮火した。

炎上させている人間は「読解していない」。発信者が何を言っているか真意を理解していない。
もちろん行間は読めないし、構文解析もできていない。
文章が読めない人は具体（単語・具体例）に引っ張られる。
具体の言葉を自分の勝手な解釈でつなぎ合わせて解釈し、抽象（背景・行間）が読めていない。
具体にしか目がいかないので抽象である話の主題が見えていない。
ごんぎつねの話も具体例であって、話のテーマは読解力である。
ごんぎつねの具体に引っ張られて全体が見えない人が、主題ではないところにイチャモンを付けて論破した気になっている。

これは大人だけではなく、児童・生徒も同じである。炎上が同じなのではなく、「文章が読めない児童・生徒は具体に引っ張られている」のである。説明文・評論文で「筆者の主張は具体例と抽象的な表現のどっちにあると思う？」と児童・生徒に聞いてみるとよい。「具体例」と答える数がいかに多いことか。これもどの学年・単元で、いつ学ぶことなのだろうか。

国語を一つの大きな山として、その頂点が児童・生徒が「楽しい」と思う気持ちだとすれば、そこに至る登山ルートは一つではない。
私の授業を生徒たちが「楽しい」「深い」と評価するとき、その登山ルートには「読解」と「議論」がある。
小久保美子（前新潟大学理事・副学長）氏が「国語を学ぶ会9月例会」において紹介された「Close Reading の基本概念」(6)には、これまで考察した内容や具体的な授業場面が抽象化されているような言葉が多くみられるので、その一部を抜粋する。

Close Reading と日本の「精読」の違い
アメリカの読むことの教育で実践されている Close Reading は、「精読」と訳されることが多い。しかし、「読み手を育てる教育」に力点を置いているアメリカの読むことの教育における Close Reading は、長らく我が国で行われてきた「教材(作品)の正しい解釈」に焦点を当てた、いわゆる「通読―精読―味読」の「精読」とは、目的も、タスクも、方法も全く異なる概念である。

Text-Dependent Questions(テキスト依存の問い)
【2種類の問い】
1 テキストの部分に焦点を当てた問い
2 テキスト全体に焦点を当てた問い
【望ましい問い】(12の両方の問いに共通)
◎生徒がテキストに戻り、evidence(証拠・根拠)を探すために読み直すことが必要となる問い

単にテキスト依存の問いをするだけでは、生徒が複雑なテキストを読んで理解する能力を、直ぐには身に付けることはできないことに留意することが重要。

生徒は、どのようにして、テキストを深く読み、evidence(証拠・根拠)を伴って応答すればよいかを教えられることが必要。

Close Reading の必要性
生徒は、テキストの詳細、考え、より深い意味を掘り下げることができる習慣を身に付けることが必要→「注意深く読むこと」を学ぶ。
そのために、教師は、生徒の思考を促す一連の問いを作成する必要がある。

Close Reading における仲間とのやりとりの重要性
●evidence(証拠・根拠)を用いる目的や方法を理解すること。
●evidence(証拠・根拠)を探しながら注意深く読む。
※これらの習慣やスキルを教えることは、簡単ではない。
理解をより伸ばし深くするためには、他の人と交渉する時間が必要。

Close Reading における仲間とのやりとりの重要性
学習は孤独なものではなく、社会的な取り組みである。
対話の機会(ディスカッション)によって、生徒はリアルタイムで自分の考えを調整する機会が得られる。(証拠・根拠)を求められたり、反論されたりすると、彼らの考えはより明確になる。

※時間の経過とともに、そして学習を重ねるにつれて、生徒は自分の考えや evidence(証拠・根拠)に対して、他の人がどのように反応するかを理解し始め、最初から自分の主張をより強力に裏付ける evidence(証拠・根拠)を構築し始める。

Close Reading は、テクストの短い一説を詳しく細かく解釈することを指すため、日本では「精読」と訳されることが多いが、「長らく我が国で行われてきた『教材(作品)の正しい解釈』に焦点を当てた、いわゆる『通読―精読―味読』の『精読』とは、目的も、タスクも、方法も全く異なる概念である。」とあるように「精読」ではなく、これまでに述べた「客観的・論理的・協働的・対話的」に「より正しく読」もうとする「読解」に近い。

「10」で「楽しい国語の授業」を高校生と大学生の感想・評価から「先生が生徒に発問――協議・読解型――教科書に明示なし――生徒がたくさん考える――協働学習――生徒が主役」と定義したが、Close Reading とも重なるその学びは、「発問」と「議論」による「読解」授業によって効果的・効率的に行うことができると考える。

注

⑴ 国語を学ぶ会　2011年、北海道教育大学釧路校において佐野比呂己(北海道教育大学釧路校)と本橋幸康(埼玉大学教授)が立ち上げた教科「国語」について自由に語り合う会。

⑵ 亀井勝一郎　文芸評論家。「亀井勝一郎全集」第 11 巻所収「青春の五つの扉」による。

⑶ 大西忠治　国語教育者。1986 年、「読み」の授業研究会を設立。

⑷ 三木卓　詩人・小説家・童話作家。『青いピカソ』は高等学校国語Ⅱ三訂版(第一学習社 1988 年)に掲載。

⑸ 『ルポ　誰が国語力を殺すのか』 学校現場や保護者への取材をもとに、子どもの国語力が奪われていく実情を追ったルポタージュ。

⑹ Close Reading　文芸批評において、テクストの短い一説を詳しく細かく解釈することを指すため「精読」と訳されることが多いが、「国語を学ぶ会9月例会」において、日本の「精読」とは違う概念を紹介された。

(やまざきけいじ／北海学園札幌高等学校非常勤講師)